
幻想奏鬼響

風月 ごん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻想奏鬼響

【Zコード】

Z3452Z

【作者名】

風月 ごん

【あらすじ】

現代に住んでいる主人公。主人公は何時もの日課である散歩をする為に、近くの神社に赴く。しかし神社に着くと、其処は見た事もない神社だった。突如として街の喧騒が聞こえなくなり、周りは自然豊かな山々だった。其処は結界で世界を囲んでいる隔離された世界。その世界を囲んでいる結界が不安定で自分の現実世界に帰る事が許されない状況の中、主人公はその世界で生活する事を決める。果たして主人公は何を思い、何を見て行くのか……？日常生活をほのぼのと綴る物語。

第一話 出会い。一幕

- 1 -

俺は何が起こったか分からなかつた。
仕事が終わり、車に乗り、家に向かつて走り出し、駐車場について車を止めて、暇だつたので近くの神社に散歩へ行つた。
其処まではいい。

自分でもちゃんと、自分の行動を覚えている。
じゃあ、此処は何処だ？

目の前に広がる樹海。

後ろには見覚えのない神社。

俺は、地元の神社の境内に上つたはず。

階段を上り終えて鳥居を潜つた後、急に景色が変わつた。
そんな事ありはしないのに。

でも、現に今いる場所は俺の知つている場所じゃない。

「ビンだよ……、ローパー……」

声に出して言つてみたところで、解決する筈がないのを承知で声に出してみる。

色々と思考錯誤しながら、神社を見て回る。
見た事のない景色と神社。

小鳥達の鳴き声しかない情景。

自動車や工事の音は一切しない。

神社を回り始めて、1週したところで俺は気付いた。

「神……隠し……」

そんな訳あるはずない！

神隠しは拉致や誘拐と言った類のものだ。

でも、今の状態を説明するにはその言葉しか思いつかなかつた。

「何だつてこんな事……。とりあえず、中に入つてみるか……」

そう言葉にした後、俺は田の前にある神社に入つて言つた。
神社はよくある大社と言われる立派な物だつた。

神社関係が好きな自分でも、初めて見る大きさの神社だつた。
所々に痛みは見えるが、それでも壮大と言つ一言で言い表せる。

「いらっしゃい……つて、この辺じゃ見ない顔ね」

「へ？」

いきなり声を掛けられてびっくりした俺は、変な声を出す。
誰だ？

巫女？

でも、腋を見せる巫女つて……。

そんな事を考えていた時、家でやつていたシユーティングゲーム
をふつと思い出した。

『「」の腋だし巫女装束の女の子はもしかして、博麗靈夢……？』

そんな考えが頭を過る。

しかし、いくらなんでもゲームの世界が現実としてある訳が無い。
もし、神隠しだとしてもだ。

あれは、空想の世界で現実じゃないんだ……。
でも、神隠しだって現実じゃない。
だったら、その可能性だってありえるか……。

そんな歯止めの利かないループ思考に入る前に、靈夢が声をかけ
てきた。

「あなたは、里から来たの？」

「えっと、俺は里では無くて、とある地方の都市から来たんですけど、『』何処なんですか？いまいち場所の把握が出来なくて……」

とつあえず、俺は当たり障りのない事を話す。

「地方の都市？『』それ？」

「え？いや、日本の地名ですか？……」

「……」

靈夢は少し考える素振りを見せると、直ぐに言葉を発した。

「貴方、外來人ね」

「外來人？」

「（）はね、『幻想郷』と言つて、貴方たちとは違つ場所つて言つ
か空間に存在していの」

俺は靈夢の説明に黙つて耳を向けた。

「貴方の様な人をこっちの世界では『外來人』と言つているのよ。
外から来た人間と言つ意味ね」

「別な空間に存在する場所なんてあるんですか？あんまり考えられ
ないんですけど……」

「実際にこうして貴方自身がこの地に足を付け、そして私がいる。
それが動かぬ証拠よ」

確かに、俺は今こうして靈夢と話している。

でも、まだ信じられない。

本当にそんな世界が存在するとでも言つのだらうか？

これは夢じゃないのか？

そうだ、夢なんだ！

夢だったら、衝撃を与えて、寝ている自分を起しせばいい。

それで全てが丸く收まる！

そう思つた俺は、近くにあつた樹木に走つていった。

「ちょっと、何やつてるのよ！止めなさい！」

靈夢の抑制を無視し、そのまま樹木へ頭からダイブする。

「……、痛い……」

「当たり前よ！行き成り変な行動しないでよねー…あーあ、血が出ちやつてる。ちよつと待つてなさい」

靈夢が社務所に救急箱を取りに行く。

それを見ながら俺は激痛に耐えていた。

痛みを感じながら、俺は思っていた。

『『これはやつぱり現実だったんだ。だとすれば、俺は帰れるのか…』』

…

計り知れない恐怖が、痛みと共にこみ上げてきた……

数分後、救急箱を持って来た靈夢が俺の額を治療してくれていた。

ある程度の応急処置が完了し、靈夢が口を開く。

「これでよしーこんな馬鹿げた自虐行為はもうしない事！分かった

！？

「はい……」

俺は頷いた。

その返事を聞いて気を良くした靈夢は、俺の目を真正面から覗き込み、ウソは許さないと睨みを利かせながら口を開けた。

「貴方、この世界にどうやって入って来たの？」

流石は巫女と書つか女性。

この辺は、ゆっくりと心配そうな声で聞いてくる。

「まったく、最近は本当にあっちこっちから人が入って来て、この辺はイライラしつぱなしだって言うのに！－睡眠時間も削られてんのよーー本当にかして欲しいわよ……」

前言撤回。

呆れた口調だつたらしい……

「そんなに、この『幻想郷』に入つて来てる人が多いんですか？」
「多いも何も、従来の人口から考えて一倍つて所かしらね。把握してるだけで……」

「うつは。それはそれは……本当にごめんなさい」
「別に貴方の所為じゃないでしょ。といひで、どうやってこの『幻想郷』に入つて来たの？」

靈夢の口調を聞いていると謝らずにはいられなかつたので、謝つてみたが、どうやらそれは正解だつたみたいだ。

口調が、先ほどよりかは優しくなつてゐる。

とりあえず、この気を逃してはダメだと思い、早急に質問へ答え

る。

「どうやって入ったかは本当に分からんです。何処にキッカケがあつたのかも。ただ、自分の家に帰つて来て、暇だつたから田課である散歩をしようと思つて、神社に行つたら……」

「此処に居たと言つ訳ね?」

「はい。鳥居を潜つたら、急に周りの景色が変わつていて、ある程度賑わつていた町並みが消えて自然豊かなこの場所いました」

「それで?」

「現状を把握しようとして、境内を歩いてました。そこで貴女にあつたと言つ訳です」

「ふーん。その時に、何か気持ち悪いモノに突っ込まなかつた?」

紫のスキマの事だらうか?

そう思いつつ、回答を返す。

「いや、本当に鳥居を潜つただけです」

「そう……」

その後、靈夢は何かを考えていた。

ボソボソと聞こえてくる単語に『あんのババア』とか『せつかくお仕置きが出来ると思つたのに』等と聞こえてきたが、怖いので、俺は何も聞いてないし聞こえてない!

「あの……」

俺は、考えを廻らせている靈夢に向かって問いかけた。

「俺は帰れるんでしょうか？」

正直、回答を聞くのが怖い。

この質問で、俺の今後の全てが決まると言つても過言ではないからだ。

最悪、この幻想郷で仕事を探さないと、餓死だ……。

「そうね。はつきり言つてこの状態では無理ね。幻想郷には結界が掛かっているんだけど、その結界が安定してない状態なの。そんな状態で送り返したら、結界の狭間を彷徨う事になつて脱け出せなくなる。そうなると訪れるのは死よ。だから、安定してからじやないと送り帰せないわ。そんな理由もあつて現状から導き出せる答えは無理つて事」

「そうですか……」

「あら、結構落ち着いているのね」

「ある程度、予測はしていました」

「そう

そこで、俺たちの会話は一旦途切れた。

重い空気を振り払うかの様に、靈夢が立ち上がった。

「此処で話すのも何だから、お茶ぐらい出すわよ。着いて来て」

そう言つて歩き出す靈夢。

俺も今後の事を考えながら、その後に着いて行く。

「あ、そりだー忘れてた！」

こんな状況なのに、笑顔になつて振り向く靈夢にドキッとした。
本当に綺麗な笑顔だつたからだ。

「私は博麗靈夢。貴方は？」

靈夢の血口紹介に、俺の顔も知らずのうちに微笑んでいた。

「俺は、かみづき神月風紫ふうしって言います。宜しくお願ひ致します」

そう言つて、俺は頭を下げた。

そして、頭を上げた先には、靈夢の手があった。
俺は、靈夢を見ながら手を握り握手を交わした。
それが幻想郷で初めての温もりだった……。

「わかった、じゃ、これおしゃりつか

そう言つて、俺を促す靈夢。

俺は少し考えて答えを口に出す。

「あの、博麗さん。お願いがあるんですけど……」
「何?」

何かの違和感があるのか、靈夢は少し顔を歪めながら言つた。

「境内をもう少し見て回りたいんです。さつさも、少し回った所で
靈夢さんと会つたし、まだお参りもしていませんしね
「それは別に構わないけど、お参りつてお金もつてるの?」
「こつちで使える通貨かは分かりませんが、一応は持つてますよ。
俺の世界では給料日でしたし……」

「ふーん」

そう言つて、前を向き案内を始める靈夢。

俺は、その時の「一ヤリとした顔を見逃さなかつた。

確か、ゲーム世界のと詮うか、通説なのか分からぬが、靈夢は
貧乏腋巫女とか言わされて、お金に困つてたハズだ。

お賽銭の話を聞いて顔が一ヤケたと言う事は、現代通貨は幻想世

界でも通用すると云ひ事かもしれない。

だとすると、香霖堂あたりでの換金が可能と云ひ事か……。

『銀行から全額下ろしてて良かったあ……』

そんな事を考えていたら、靈夢と俺は神社の賽銭箱前まで來ていた。

「此処が博麗神社の本殿よ」

「最初も思いましたけど、痛んでる箇所が見受けられますよね?」

「あー、これね。ちょっと事情があつて直せないだけよ」

「そつなんですか?でも、近くで見ると本当に立派だ……」

お世辞でもなく、心の底から本当に思つた。

遠くから見た時も思つたが、近くで見ると本当に立派だ。

ただ、キヨトンと其処に居座つているだけの建物なのに、神々しさがあり、見ていろだけでも飽きない。

現代の世界にある神社とは違つて、空氣そのものが違う。場所にもよるが、普通の神社だと此処まで澄んだ空氣や霧囲気がない。

でも博麗神社は違う。

霧囲気は当然として、体の中から綺麗になつていいく感じがずっとしている。

今まで溜めて来た嫌な物が浄化されて行く様な感覚。

「ちゅう、ひなみと何泣いてるのよ。」

「え？」

靈夢に言われて田ん手を当てる。

涙が出ていた。

「あれ？ 何でだ……？ でも、嫌な気分じゃないんだよなあー」

寧ひ、気分が澄んで行き、とても清々しい気分だ。

「はい」

その一言共に、ハンカチを差し出してくれている靈夢。

「ありがとうございます、……」

ハンカチを素直に受け取り、涙を拭ぐ。

「風紫は感受性と靈感が強いよね」

「感受性と靈感？」

「向こうの世界で何も無い所から、変な見えたり、感じたりしなかつた？」

「ああ、ありました。それも頻繁に……」

「やつぱり……。この神社ね、この幻想郷の結界守つている神社な
のよ。それなりに力があるつて事なんだけど、風紫は深層意識の中
でソレを感じとっちゃつてるのね」

「ほえー」

親切に解説をしてくれている靈夢。

一通りの説明を聞いて分かつた事は、その感覚は大事にした方が
良いとの事。

その感覚を研ぎ澄ませば、妖怪や惡靈の類が何処にいるか直ぐに
分かるから、逃げて自分の身も守れると言つ事だつた。
いわば人間レーダーと言つ事か……

「さて、どうするの?」

「え?」

また思考の渦に入り込みそうになつた時だつた為、素つ頓狂な声
で返事をしてしまう。

「お参り、したいんでしょ?」

「あ、そりでした……」

そう言つて苦笑する俺。

目の前にあるお賽銭箱に財布から抜き取つた1万を投げ込む。

その時の靈夢の顔は、満面の笑顔だった……

靈夢の顔から皿を離し、博麗神社に挨拶をする。

『「コレから」の世界でお世話になります。宜しくお願ひ致します。
何かあつたらどうかお助け下れ。』

そんな事を思いながらお参りを終える。
そして靈夢に向き直ると……、やつぱり脳しへ位の笑顔だった。

「博麗さん……」

声を掛けても気付いていない。
どうやら、笑顔のまま違う事を考へて居る様だった。

「おーい…博麗さん…！」

今度は肩を揺らしながら声を掛ける。

「え……」
「お参り終わりましたよ」
「え……、あ、じゃあ、中に行きましょつか」

やつと現実の世界に帰つて来た靈夢は、そう言つて俺の前に立つ。

そして、何かを思い出した様に、俺に向をかえ、言葉を口から出す。

「あ、そうだ

「はい？」

「私の事は、靈夢で構わないわ

「そうですか？」

「博麗とか言わると、背中が痒くてしおうがないわ……。ちなみに、わん付けも禁止！」

「はは……、了解しました

靈夢はまた向きを変えて歩きだした。

俺はその後を付いて行く。

そして、小さな角の生えた女の子が俺の後を付いてくる。

小さな角の生えた女の子？

そう思つた瞬間、後ろを振り向く。
いた。

女の子が。

角の生えた……。

意識が覚醒した瞬間、俺は声を上げていた。

そう返してくる女の子。

その声を聞いてか、靈夢も歩いていた足を止めて振り向く。

「またか……」

「その言い方、酷くない？」

そう言いながらケラケラと笑っている女の子。
確か、この子は伊吹萃香……。

ゲームはやつた事ないけど、Wikiか何かで見た事あるな……。
まさか今現れるとはなあ。
運が良いのか悪いのか……。

「あんた、何時の間に現れたのよ」

「今さつき」

「何時も気配を消して来る事も無いでしょうが！」

「癖なんだもん。でも、其処のお兄さんは気付いたみたいだけど？」

「あー、この人は感受性が豊かなのよ……」

「ふーん。それで、誰？この人……」

なにやら俺の話になっているみたいだ……。

しかも、感受性が豊かってだけで納得出来るのか？

流石は鬼の子？萃香？。

まあー、？子？と言つても、俺よりは相当な年上なんだろ。

しかし、この人誰と問われているのに、答えないのは悪いな……。

そう思つて、俺は自己紹介をする為に口を開く。

「あ、初めまして。俺は、神月風紫と言います。これから宜しくお願ひ致しますね」

言いながら俺は、手を萃香に出す。

しかし、萃香は俺に興味津々で、手の存在に気付いていない。

「あたしは伊吹萃香って言つて。よろしく。でも、あたしの姿を見て驚かないのは凄いね……」

「いや、思いつきり驚いてたじやないの」

「それは、急に現れたからでしょ？違くて、あたしの姿にだよ」

「ああ、言われて見ればそうね」

そう言つて、2人は俺に視線を向けた。

「貴方……えっと、風紫だっけ？」

「そうです」

「風紫は外来人でしょ？なのに、あたしの姿を見て驚かないって変じやん」

「うーん。確かに伊吹さんの格好は変わつてますけど、普通の女の子じゃないですか？別に驚きませんよ」

俺の言葉に萃香は、逆に驚いた様子だ。

そして瓢箪に伸ばしていた手を自分の角に向け、指をさす。

「「」の角、不思議に思わないの？」

「不思議ですよ。でも、「」の世界では妖怪も幽霊も普通に出てる」と聞いていますし、角の生えた女の子が居ても不思議じゃないですよ」

俺は本当にそう思つていた。

この世界は何でもありと言つ世界らしい。

田の前に出てきた者に一々驚いていたら、心臓が幾つあつてもたりなくなる。

なら、素直に全てを受け入れながら、生きた方が驚くよりも何倍も楽しい。

「あたしが鬼と言つても？」

そう言つた萃香は不適な笑みをこぼす。

その目は、獲物を見つけた様な興味に満ちた目。

正直、怖い。

怖いけど、此処で田を逸らしてしまつたらダメだと直感的に思つた。

だから、その田を見ながら俺はハッキリと言つた。

「鬼でも喋られれば仲良くなれると思つています。それに、これからこの世界で生きて行かないといけないなら、尚更、ちゃんと前を向いて今を見つめていかないと……」「……」

暫く俺は萃香に興味の田で見つめ……、否、睨まれていた。
蛇に睨まれた蛙と言つのはこつ言つ感覺かもしれない。

萃香の田から田が逸らせないし、体がまつたく言つ事を聞いてくれなかつた。

そして、数分がたつた時、ふと萃香が笑い出した。

「あはは、お前面白じよー！妖怪と仲良しかー！あたしが今この時、
お前の肉を酒の肴にしてもいいんだよ？」

背中から冷や汗が出て来るのを感じる。

そんな嫌な汗を感じながら、必死に抵抗の言葉を紡ぎ出す。

20

「ソレは勘弁願いたいです……」
「あはは」

萃香は一頻り笑つて、さうじ口を開いた。

「大丈夫。食べたりはしないよ」
「ありがとうございます」
「でも、肴にはするけどね」

お礼を言つた後、安堵のため息をしていた俺に追い討ちを掛ける
様な発言をする萃香。

俺は笑顔を硬直させたまま、萃香に聞いた。

ג' ינואר ?

— 外来の事を聞きながら酒を飲むのを

あたる「

萃香は、自分の瓢箪に手を戻して、瓢箪の口をあさるとそのまま、中身を口の中に注ぎ込んだ。

る。

あの日は生きた心地がしなし……

「あ、風紫！」

一何ですか？伊吹さん

「伊吹さんは話めて、今後ともよろしく！」それと

卷之三

俺は苦笑しながら答えた。

「では、何と呼べば？」

「萃香でいいよ」

「了解です。今後ともよろしくお願ひします。萃香さん」

そう言つて俺は再度、手を出した。

手を出した後、手が潰されない様こと細つのはお約束だらつか……

「…ちゃん？も禁止ー！」

笑顔で言いながら、萃香は手を握り返してくれる。
その手は、小さな女の子の手だった。
強く握つたら潰れてしまふかの様な纖細な手。
萃香の温もりが掌から伝わってくるかの様だった。
それと、ちゃんと力をセーブしてくれているのか、俺の手は無事
だった。

「わい、それじゃいいかしら？」

靈夢が言つ。

「ああー、「めん」「めん。ほら、こいつー風紫ー！ー！」

萃香が言つ。

「お待たせして済みませんでした。行きまじゅうがー。」

第一話 出会ご。 一幕（後書き）

初めまして。

風月 ごん と申します。

丁稚な作品ですが、どうか宜しくお願い致します。

こんな作品でも良ければ、感想などありましたら、気軽に書き込んで頂けると嬉しいです。

第一話 出会い。終幕

- 3 -

俺の言葉を合図に3人が動き出し、社務所兼住居へと向かい出した。

その間に色々と、神社の説明や幻想郷の説明等もしてくれた。家に着いた後、靈夢はお茶を用意する為、台所へ向かつたのだった。

靈夢に「此処で待つて」と案内された場所は、密間であるつか。殺風景な部屋の中に木製のテーブルが1つと茶箪笥と衣服箪笥が置いてある。

俺が、何も無い部屋をただ見つめていると、萃香が口を開いた。

「驚いたでしょ？此処で靈夢は生活してるんだよ」

笑いながら萃香は言つた。

確かに驚いた。

貧乏腋巫女と噂を聞いていたが、コレじゃ流石に寂し過ぎる……。

「此処で？此処って客間じゃないのですか？」

「まあー、客間兼居間って所かな」

「萃香、余計な事は言わなくてよろしくー！」

俺と萃香が話をしていると、お茶を持った靈夢が帰つて來た。

萃香は靈夢から言われた瞬間、俺の後ろに隠れ、顔をヒョロヒョロと
だし、苦笑いを靈夢に返す。

それを見た靈夢は、ため息を一つして、お茶をテーブルの上に置
いた。

「必要最低限の物しか揃えられないのよ。だから、あんまり気にし
ないで……」

そう言つた靈夢は何だか寂しそうな顔をした。

「もうなんですか……」

何か事情があるのだろうと思つた俺は、それ以上の事は聞かない
様にした。

「それより！」

今の心境を吹き飛ばす様な感じで、靈夢は明るく言つ。

「風紫はこれからどうするの？」

「そうですね。とりあえずは仕事探しつて所じゃないでしょうか。
自分の貯金だけで生活も出来ないですし、無限にある訳でも無いで
すからね」

そう言つて、俺は苦笑する。

自分で言つた内容を復唱するかの様に、これからの事を考える。仕事をするにしても、この世界で自分が出来る事があるのだろうかと……。

色々と考えを巡らせている間に、お参りをした時の靈夢の表情を思い出した。

お賽銭を入れた時の表情だ。

その事を思い出した俺は、靈夢に問い合わせ様と顔を上げる。それと同時に、靈夢が口を開いた。

「あら、一応、考えてはいたのね」

「当たり前ですよ。何もしないで死ぬ事を選ぶ様な人間じゃないつもりです。それに、せっかく新しい土地……って言つた、世界に来ているのに、見て回らないのは損じじゃないですか」

「本当に風紫つて変わってるねー」

萃香が瓢箪のお酒を飲みながら言つて來た。

確かに変わつているかも知れない。

普通の人だつたら、こんな状況は意地でも脱出しようとすると違いない。

俺だつて最初はそうだった。

鬼が居たり、妖怪が居たり、幽靈が居たり、何でもアリのこの世界から早く脱出したいと思つていた。

でも、その気持ちより、今はこの世界をただただ知りたいと言つ氣持ちが強い。

その気持ちに嘘は無い。

しかし、今の状態のままでは流石に無理が過ぎる。

予備知識も無いままに、見ず知らずの土地を歩き回る程、危険な行為は無い。

だったら、仕事をしながら情報を集めて、歩き回った方が良いに決まっている。

その為には、まず仕事を探して安定した収入を得るべきだひつ。そして、自分が持っている現代の通貨が使えるのかをハツキリとさせておかないとダメだ。

俺は萃香の言葉に苦笑しながら返事を答え、自分の疑問を靈夢にぶつけてみる。

「まあー、変わっていると言えば変わっているかもしません。普通の人間だったらさつさと逃げたいと、俺も思いますから……。でも、自分の現実に帰れない今は、逃げる事より前に進まないといけない。今立ち止まつたら、それこそ？死？を意味していると思いますしね」

「自覚している辺りは、自分の考え方の訳か……」

萃香はそう言って笑いながらお酒を口に含む。

俺はそのまま言葉を続ける。

「はい。それなりにはちゃんと考えてはいますよ。それで、靈夢に質問があるので、俺が持っているお金は、この幻想郷でも使えるのですか？」

靈夢は飲んでいたお茶を置き、質問に答えてくれた。

「使えると言つのは語弊があるかな。正確には、換金が出来るのよ
「換金ですか？」

「そう。香霖堂と言つお店でね」

やつぱり。

俺の予想は正しかつたみたいだ。

多分、香霖堂で換金した現代通貨は紫との物々交換で商いが成り立つてているのだろう。

香霖堂の店主は、外来人から現代通貨を幻想郷の通過と換金し、紫が現代の何かを持つてきて現代通貨での取引を行つていると云つ事だらうか……。

もしかしたら、香霖堂の店主が現代の物を趣味で集めていると云う可能性も否定出来ないか。

もしそうだつたら、換金率は低そうだなあー……。

そう考へて俺は苦笑すると、本題となる質問を靈夢に投げかけた。

「さつき、お費錢として入れた1万円は、幻想郷で何日暮らせんべりの通過に換金されるんですか？」

「そうね。使い方にもよるけど、普通の家庭だつたら1ヶ月から2ヶ月は使えるんじやない。私だつたら3ヶ月はいけるわね！」

そう言つて、片腕を上げる靈夢。

傍らでは苦笑している萃香の姿がある。

靈夢は相当な節約生活をしているのだろう。

お費錢に頼つて生活している者にとつては、その日その日を生活

するものが大変なのだろうと思つ。

だからか、さつきの笑顔でトリップしていたのは……。

だったら、いい交渉材料にはなるかな。

姿勢を正して更に言葉を続ける。

「なるほど。それだけ高い単価が付くと言つ事ですね。靈夢、お願
いがあります。仕事が決まるまで、此処でお世話になれないでしょ
うか？ちゃんと、生活費も入れますから、どうかお願ひします！」

そう言つて、頭を下げる。

自分には靈夢の顔は見えない。

萃香のお酒の飲む音だけが聞こえる世界。

生活費を入れると言つても、相手は女性で俺は男だ。
普通だったら断るだろ？と思つ。

断られたら断られたで諦めるしかない。

でも、今頼りになるのは靈夢しかいないのも事実。

俺は返事が返つて来るまで頭を下げ続けた。

「男が何時までも頭をさげてるんじゃないわよ……」

靈夢の言葉に合わせて、ゆっくりと頭を上げる。

田の前に居る靈夢の表情は、真剣なものだった。

萃香は庭を見ながら成り行きを見守つてゐるかの様だった。

「生活費は十分に貰つてゐるわ。あんたを世話する分もね」

「それじゃ……」

「ええ、仕事が決まるまでだつたら、別に良いわよ。ただし……」

靈夢は真剣な表情から、笑顔になり言葉を続けた。

「庭掃除や、本殿の掃除とかは色々やつてもらうから、そのつもりでね。働かざる者食うべからずってね」

「分かりました。世話になる身だし、頑張るツス！」

「うん。よろしい。じゃ、明日からと言つた事で、今日はゆっくり休んでなさい」

「了解ツス！」

「それじゃ、あたしは仕事探しに行く時、護衛でついてつてやるよ」「え？ いいのですか？」

「1人で歩き回ると、数日もしない内にバットエンドを迎えるよ？ それに道案内も必要だろ？ 暇つぶしに丁度いいし、別にかまわないよ」

「ありがとうございます。萃香」

そう言つて、俺は萃香に頭を下げる。

萃香はカラカラと笑いながら、瓢箪を口に運んだ。

そんな様子を見ながら、俺も少し冷めたお茶を口に運んだ。暫く靈夢と萃香の3人で雑談をしていた。

俺が住んでいた現代の話。

萃香や靈夢が住む、幻想郷の話。

色々と話していると分かるが、幻想郷は江戸・明治にかけての日本様な姿と言つ事だった。

自分には、辛い環境かも知れないと言つ事は分かつてていたが、ちゃんと生活が出来るのかはやっぱり不安だった。

でも不安ばかりを感じても、前には進めない。

なら、少しでも前に進める様に勉強したり努力したりする。

今の俺には「」のぐらうしか出来ないけど、頑張って生活して行きたいと思つ。

当面の田標は職探し。

うん。

頑張るわ。

この世界で生きていく為にも……。

- 4 -

「あつ……

俺は会話が途切れた時、ある事を思い出して声を上げた。
そして、財布を取り出して靈夢にお金を渡す。

「靈夢、」のお金だけど神社に奉納として受け取つてくれないですか？」

「なによ？ 行き成り……」

現金に視線が釘付けになつてゐる靈夢。

その表情は、不思議そうな顔をしているが、とびつきりの笑顔だ。
そのうち、涎とか出て来るんじやないかとも思つ。
萃香も物珍しそうに見ていた。

「えっと、本殿を見た時の傷が気になってしまって……。全然足りないと思つけど、修繕費の足しになればなって思いまして……」「ふーん。そう言つた事なら貰つておくわ。でも……」

諭吉さん5人の内、2人が戻つてきた。

「このぐらーいあれば十分に直せる。お釣りが来るぐらーいよ。素直に礼を言つわ。ありがとう」「そんな！あれだけ立派な神社はそんそんお田にかかれないですし、やつぱり痛んでいたら可哀想ですから」

そう言つて、俺は本殿のある方角を見る。

あんな立派な神社は本当に少ない。

ましてや、泣いてしまう程の神社だ。

綺麗な姿が見たいと言つのは、俺の我儘だったりする。

「もし、お釣りが出たら、靈夢の私物でも買つて下さいね」

「わかったわ。さて、今日も遅いし、夕食の支度でもしていくわ。萃香、手伝つて頂戴ね？」

「あいよ」

そう言つて、微笑む靈夢。

萃香は靈夢の後に着いて行く。

「靈夢、俺は？」

何もしないと言つのは、流石に悪いと思つたので、何か手伝える事がないかを確認した。

「今日は休んでなさいと言つたでしょ？明日から大変なんだから、ゆつくりしてなさい」

「了解

俺は靈夢の言葉に同意し、お茶を注ぎ直し、お茶をすする。

暫くして靈夢と萃香が夕食を持つてくれる。

夕食が並び、2人が席に着く。

『 いたします』

3人同時に食事を始める。

此処での会話も、他愛もない会話が続く。

俺自身、独り身だったのもあって、こいつは会話をしながらの食事が懐かしく思えた。

流石に泣く事まではしなかつたが、グッと来る物はあった。

夕食も食べ終わり、萃香も自分の寝床に帰つていった。

靈夢に部屋を案内されて、床に就く準備をする。

準備が終わり、靈夢が部屋を去る時、俺は自然と口が開いていた。

「靈夢、本当にありがとうございます。明日からも宜しくお願いします」

「はいはい。いつかいつか宜しく頼むわよ? さあ、明日から大変なんだから早く寝なさい」

「了解」

子供を寝かしつける母親の様に振舞う靈夢。

俺が返事をしたのを確認すると、靈夢は自室に向かう。さて、明日から神社の手伝いだ。

見ず知らずの世界だし、色々な事が起こるだらつ。

嫌な事。

嬉しい事。

死にそうになる事。

その他にも色々な事。

ちゃんと俺は歩いていけるのか……。

色々考えると不安しか残らない。

でも、今からこんな事を考えてを何も始まらない。

当面は、仕事探し。

この目標を達成出来る様にだけはしないとな……。

俺は、当面の目標を再確認してから床に就いたのだった。

第一話 出会い。終幕（後書き）

ここ数ヶ月、本当に暑いですね。

家に空調機が無いので、会社で上司の田を盗みながら書いてるアホです。

皆様もお体にはお気を付けをつー。

雀達が歌い始めた頃、俺は目が覚めた。

俺は布団から起き上がり、今まで寝ていた布団を折り畳む。そして、押入れの中へ運び、障子を開けて、庭を見る。

昨日は疲れていた所為か、布団に入った後、直ぐに意識が無くなつた。

今まで、家に帰つてからネットとか趣味に時間をかけていた事で睡眠時間を減らしていたが、此処は何も無い。

何もやる事が無ければ、ただ寝るだけ。

今までの睡眠不足の所為もあるかもしけないが、昨日は本当に良く眠れた。

気分も凄くスッキリしていて、清々しい朝を迎えている。庭を見ながら、昨日の夜に皆で食事をした居間へ向かった。

靈夢はまだ起きていないので、部屋は静まり返っている。

そのまま台所に向かい、様子を伺う。

やはり、誰も居ない。

顔を洗いたいなーと思い、水瓶を覗く。

中に入っている水は残り少ない状態で、今日で無くなる可能性があつた。

水瓶を確認した俺は、水を補充しようと井戸に向かう為、玄関から外に出た。

昨日の靈夢から、井戸は裏庭にあると言つ話を聞いておいて良かったと思う。

いきなり役立たずの居候とか嫌だしな。

そう思いながら、井戸へ到着。

井戸から水をくみ上げ、最初に自分の顔を洗う。

地下水を使つていいのか、水が凄く冷たくて気持ちいい。顔を洗つた後、近くにある桶を使って、水瓶と井戸を往復する。水瓶も満水状態になり、最後の水を井戸からくみ上げ、水瓶に向いた時だった。

「あら、早いのね。おはよつ、風紫」

靈夢の声が背中から聞こえて来た。

「あ、おはよつ、やれいす、靈夢。あつちに居た時は、もう少し早く起きていたので、ゆっくり寝た方じやないかな」

「ふーん、そうなの？ 昨日は良く眠れた？」

「はい、おかげ様で！ 朝から気分爽快です」

俺は、自然と笑顔になりながら返事を返した。

靈夢の寝巻きは、白地の浴衣だった。

髪はストレートにしており、まだ眠たそうにしている。

俺の返事を聞きながらボサボサ頭を梳しながら、欠伸を一つ。そんな彼女を見て、俺は微笑む。

「ところで何をしていたの？」

「あー、水瓶の水が無くなつていたから補充しておきました。俺に出来る事は力仕事ぐらいですしね」

「そう言えばそうね。早速、仕事をしているのはいい心掛けね」

「ありがとうございます」

「それじゃ、私は着替えてくるから朝食は待つていて」「了解！」

そう言つて靈夢は奥の部屋に消えた。
靈夢の背中を見送つた後、桶に入つてゐる水を水瓶に移し、お湯を沸かそうと思いやかんに水を入れる。
幻想郷にガスと言う文明の利器は無く、釜戸で火を起こすみたいだつた。

近くに火種用の杉の木と炭が置いてある。
釜戸の中を見ると、掃除とかはしていない状態で、まだ使える炭も中に置いてあつた。

俺は、火種となる杉の木を少し細かくしてから、釜戸の中に入れる。

その後、火を着ける為の道具を探す。
予想では火打ち石とかかなと思つていたが、何故かチャツカマンがあつた。

多分、流れて来たのだろうと思うけど、ちょっとシヨツクだつた。
この流れだつたら、火打ち石がセオリージャないか等と勝手な事を思いつつ、火種に火を着ける。

杉の木は、油を多く含んでいるので、直ぐに火は大きくなる。
其処に、炭を二個程投入。

炭の火力をバカにすると痛い目に合つので、少なく入れる。
燃えカスの炭もあるから、十分な火力になる筈だ。

空気を送り込みながら、炭に燃え移るのを確認する。

炭に火が移つたのを確認して、やかんを釜戸の上に置く。
後は朝食の準備を行う所だが、人の家の台所事情は分からぬので黙つて居間へ移動する。

居間へ移動した時、着替えて來た靈夢と会つた。

靈夢は、薄つすらと化粧をしており、先程とは違つた印象を魅せ

る。

「お待たせ。今から朝食の準備をするから手伝って」「了解ッス。あ、お湯沸かしていますので、釜戸を一つ借りていますよ?」

「別に構わないわよ。って言つたか、良く釜戸の使い方知つてたわね？」

「えつと、あつちに居た頃、うちの祖母の家が釜戸だったで……」「そうなの?他の外から来た人から聞くと、?ガス?って言つのがあつて、それを使ってコンロで火を点けるって聞いたわよ?」「地域によつてマチマチなのですよ。確かに自分の家ではガスを使つていましたけど、釜戸を使つている家庭はありますよ。田舎限定ですけど……」

「ふーん。そなんなんだ?」

苦笑しながら俺は答えた。

確かに日本を探してもガスが整備されていない地域の方が珍しい。釜戸を使つている家庭は、何かのポリシーみたいなのがあるのはないかと思う。

そんな事を考えながらも、俺は靈夢にチャッカマンについて聞いてみた。

「俺も不思議に思つた事があつたのですが、火を着ける時、チャッカマンなのですね。コレつてあつちの世界の道具だと思いましたけど……?」

「んー、コレは香霖堂で買ったのよ。火付け石より簡単だしね。ただ、名前は分からなかつたけど……」

「香霖堂……？」

朝食の準備をしながら苦笑する靈夢から帰つて来た答えは、予想通りの答えたつた。

色々と外の道具は役に立つてゐる様だ。

俺は、やつぱりと言つ氣持ちを押し殺し、俺は鸚鵡返しで靈夢へ聞いた。

「所謂、雑貨店みたいな所よ。香霖堂には外の世界からの道具があるから、行つて見ると面白いのも見つける事が出来るかもしないわよ?」

「それは是非、行つて見たいですね」

「後で萃香に相談してみなさい」

「了解です!」

そう言つて靈夢は鼻歌を歌いながら野菜を切り始めた。

料理をしている靈夢は、何処か楽しそうにしていた。

お湯が沸いたのに気付いた靈夢は、お湯をポツトに移す様にことつて來た。

俺は言われた通り、湧いたお湯をポツトに移す。

靈夢はこれも香霖堂で買つて來たと言つていた。

その言葉で香霖堂に益々興味が引かれる。

とりあえず、今日の行き先の一つに香霖堂は必ず入れよつとポツトに移しながら決意する。

お湯をポツトに移し終わり、手持ち無沙汰になつた俺は、靈夢に何をしたら良いかを確認する。

「んーっと、それじゃ、お味噌汁を作るから、鍋に水を入れて沸かしてくれる?」

「味噌汁ぐらいだつたら作れますよ?あと、一人暮らしもしていたから、ある程度の料理は作れます。男料理だけど……」

「そりなんだ。じゃあ、お味噌汁お願い。味噌とかは、あの戸棚に入ってるから」

「了」解

「あの食事の用意は私がするから。貴方は、お味噌汁作り終わったら、境内の掃除をお願い。用意が出来たら呼びに行くわ」

「はーい」

俺は返事を返し、味噌汁の調理に取り掛かる。

靈夢に言われた戸棚を開けて、味噌と出汁を取り出し、湧いたお湯の中に適量を入れる。

そこに靈夢が味噌汁の具を入れて完成したので、掃除用具の場所を靈夢に聞いて、境内の掃除に取り掛かる。

境内と行つても何処から何処までを掃除するのか分からず、とりあえず神社前の掃除を始める事にした。

- 6 -

毎日の日課で掃除をしていたのか、参道には落ちている葉や、小石はあまり見られなかつた。

掃除を始めてから10分ぐらいたつた頃、萃香が空からやつて來た。

その隣には簾に乗つた少女が1人。

二人の姿を確認して、動かしていた手を止める。

えつと……。

何でもありの世界なのは納得しているつもりだけど、何あれ？魔女？

萃香は俺に気付いたのか、手を振りながら近づいてくる。一緒になつて近づいてくる少女。

姿が確認出来るぐらいになり、彼女の外見が肉眼で確認出来た。白いエプロンをしているが、明らかに魔女ルックスだ。まさか、魔女が居るとは思いもしなかつたよ……。でも、確か w i k i には魔理沙と言つたキャラクターが魔女だった様な……。

萃香に手を振り返しながら、そんな事を思つ。

「おはよー、風紫」

43

萃香は俺の前に着地して、挨拶をしてくる。隣の少女は簾から降りて、萃香の隣に立ち、そのまま俺を興味深そうに見てくる。

そんな視線に耐え切れず、俺は目をそらし、萃香に挨拶を返した。

「おはようございます、萃香。えつと、コチラの方は？」

俺は魔理沙らしき人物の視線にビクビクしながら聞く。当の本人は目を見開いて、キラキラした視線をぶつけて来ている。俺の何処に興味があるのか……。俺の何処に興味があるのか……。ある意味、ちょっと怖い。

「あー、「ツチは？霧雨魔理沙？」って言つの。本人曰く、普通の魔法使いだそうだ」

「へー、そうなのですか。魔法使いかあー」

率直な感想を言いながら、魔理沙に向き直る。
魔理沙の目線は変わらない。

だから、怖いって……。

萃香は俺に向けて、俺の紹介を始める。

「魔理沙、コツチの人は？神月風紫？」って言つの。外来人だよ」

萃香の紹介が終わり、俺は魔理沙に向かって手を差し出す。

「風紫です。宜しくお願ひ致しますね」

「おう！魔理沙だぜ！コツチこそ宜しくな！」

お互いの自己紹介が終わり、握手を交わす。

そこに靈夢が朝食の準備を終わらせて、俺の所までやつて來た。
準備をしていた為か、袖を捲くつた状態だ。

「風紫！準備終わつたわよー。つて、魔理沙に萃香じゃない。こ
んなに朝早くどつしたのよ？」

その問いに魔理沙が答える。

「萃香から変わった外来人が来てるって聞いてね。どんなヤツかと思つて来てみたんだ。ついでに、朝食も頂くわよ」

「あなたの場合は、朝食のついでに風紫を見に来たんでしょう？」

そんな会話が靈夢と魔理沙で交わされる。

俺と萃香は、そんな二人のやり取りを見ていた。

魔理沙が俺を興味津々な目で見て来たのは、萃香の言葉が原因だつたのかと、一人納得した。

一人の会話を聞きながら時間がかかると思った俺は、掃除の続きを始めた。

萃香は俺の行動や一人の行動を見ていたが、何もする事がなく暇になつたのか、俺に話かけて来た。

「ねえ、風紫。」

「なんですか？」

「普段から外の掃除つしてたの？」

「いえ、やつてないですけど……、どうしてですか？」

「いや、手付きが慣れてるなあーつて思つて」

「そうですか？でも、そう言つてもらえると嬉しいです」

家の掃除とかは会社が休みの日にしていたが、外の掃除と言いつのは、まったくと言つて良い程、した事がない。

萃香の言葉に、俺は嬉しさを隠しきれない状態で掃除を続けた。

未だに靈夢と魔理沙が話をしているのを見ながら掃除をしていて思つ。

その疑問を萃香に聞いてみた。

「萃香、あの二人つて何時もあんな感じなのですか？」

「んー、そうだね。姉妹みたいな感じで、話が尽きない状態だよ。止めに入らないと、永遠と話を続けるんじゃないかな」

「止めなくていいんですか？」

「そろそろ止める?」

「いや、俺に聞かれても……、折角の朝食が覚めてしまつのではな
いでしようか?」

「それもそうだね。どれ、止めに行こうかね……」

「そう言つて、萃香は一人の間に行こうとする。

その姿を見て、俺は待つたをかけた。

「どうしたの?」

「ちょっとと聞きたいんですけど、萃香つて朝食は何時も靈夢と一緒に?」

「毎日じゃないけど、大体は靈夢と一緒に食べてるかな」

「それじゃ、霧雨さんも?」

「魔理沙は自分の家で取る事が多いよ。蓄えが切れたたら色々な所に
出没するけどね……」

「そうですか?」

「何でそんな事を聞くんだい?」

「ただ気になつただけなので深い意味は無いですよ。單なる好奇心
です」

「ふーん」

「あ、あと今日の事でお願いがあるんですけど、香霖堂に連れて行つてもらつても良いですか？」

「別に構わないよ。ただ、あそこの店主も色々と変わつてゐるから、気を付けた方が良いよ」

「そうなんですか？」

「会えば分かるさ」

萃香は笑いながら言つた。

その後、言い争いと喧嘩のお喋りな一人の会話を止めに入る。俺はその様子を見つつ、萃香と靈夢が手招きをしているのを確認して、外簾を持ったまま、三人と合流した。

居間に移動しながらも言い争いを続ける靈夢と魔理沙。

「仲がいいなあー」と呟いたら、一人とも声を合わせて、「腐れ縁だ」と言われた。

良い感じにシンクロしているあたり、本当に仲がいいと思つ。

第一話 就職活動？ 一幕（後編）

……暁一。

この異常気象が終わるまで週一回のペースは保てそうに無いかも……。

一話の『一幕』を『終幕』に変更しました。
宜しくお願い致します。

- 7 -

居間に着いた後は、俺がご飯をよそい、靈夢がおかず等を並べていいく。

神社なので、神前料理系の質素な食事なのかと思ったが、そういう無い様だ。

疑問に思ったので靈夢に聞いた所、朝食はちゃんと取らないと力が出ないらしい。

現代の食事は偏りがあったり、朝食を抜いたりと言つのは当たり前だが、やっぱり一日の源は、朝食にある。

この辺りは、幻想郷も現代も変わらないらしい。

靈夢から質素な食事がいいのかと問われ、勘弁して下さること答えたのは言つまでも無い……。

「ところで霧雨さん、萃香から変わった外来人と聞かされて來たみたいですけど、何て言われたのですか？」

「亞也で朝食を食べながらの会話が弾み、俺は自然とその質問を口にしていた。

やつぱり、自分の評価つて気になるし、どんな印象を持たれいるのかも気になる。

「なんか、その？霧雨さん？つてむず痒いから、名前で呼んでくれないか？ちなみに、さん付けも禁止ね」

「え？ あ、 はい。 分かりました」

「こここの世界の人達は、 敬称で言われるのに慣れていないのだろうか。」

靈夢に萃香、 魔理沙までもが、 さん付けを禁止して來た。

魔理沙本人が嫌がっているのならば、 敬称付けは止めるが、 この辺りも後々調べて見ようと思う。

「えーっと、 ？ 風紫の事を何て聞かされていたか？ だっけ？」

「はい」

「変わった人間と言う事と、 妖怪とも友達にと言う珍しい人間だと言つ事だけだぜ」

「それだけで、 あんな興味津々な目をされていたのですか？」

「何を言つているのよ。 普通の人間が妖怪と仲良しになりたいなんて普通は言わないぜ？ いくら外来人と言つても」

「らしいですね。 でも、 納夢や萃香から聞いた話だと、 妖怪にだってちゃんとコミュニケーションが取れると言つていました。 なら、 仲良しまでは行かなくても、 話をする仲には成りたいなと……」

「やっぱり、 お前は変わってるよ。 逆に食われるかもしれないのに。 でも、 その心意気は氣に入った。 まあー、 努力してみるんだな。 何かあつたら、 相談に乗るぜ」

「ありがとうございます。 その時は、 宜しくお願ひ致しますね」

そう言つて、 僕は頭を下げた。

靈夢と萃香は、 僕達の話を聞きながら食事を続けていたが、 一段落着いたのを見計らつて、 納夢が口を開いた。

「さて、今日の予定なんだか、風紫はまだあるの？」

「はい。今日は萃香に付き合つてしまつて、香霖堂に行つた後、里に行つて見たいなと思つてこます」

萃香は、味噌汁を飲みながら親指を立てる。
任せとけ！と書つ合図なのだろう。

「私は、キノ「狩りに行くわ！」

「あんたには聞いてないわよ……」

そう言つた靈夢は頭を押さえていた。
頭を押されていた手を茶碗にも戻しつつも、目線を俺に戻し、更に言葉を続ける。

「風紫、その予定の順番を逆にしない？」

「え？ 何故ですか？」

「先に里に行つて、富大工の所に神社の修復を依頼しようかと思つていたの。折角、直せるお金がある事だしね」

「あ、なるほど。俺は別に構いませんよー」

俺の言葉と同時にぐらぐら、萃香も左の親指を掲げる。

右手にはじ飯が山盛りになつてお茶碗。

何時のお代わりをしたのだろう……。

「その時に、ある人物を紹介するわ。きっと色々と相談に乗ってくれると思つわよ」

「はい。わかりました。頑張つてお供させて頂きます」

俺と靈夢の話が続く中、萃香は「」飯の四杯目をチャレンジ中、そして、魔理沙は味噌汁をお代わりし、そこに、見た事の無い縁のキノコを混ぜて飲んでいた。

あのキノコ、魔理沙の何処に入つていたんだ……？

そして、魔理沙が美味しそうにキノコを食べているが、食べると同時にピロツロツローンと聞こえそうになるのはビックリだらうか…？

そんなこんなで各々が食事を済まし、お茶を飲み始める。

俺は、皿洗いをする為に台所へ。

靈夢は、お茶を飲んでからでいいと言つてくれたが、お皿の量も多くないので、全部終わらせた後に頂く事を言い、皿洗いに集中する。

家事を済まし、靈夢の入れてくれたお茶を頂く。

靈夢と魔理沙は、相変わらずの言い争い改め、お喋りに花を咲かす。

萃香と俺は時折、会話に入りながら楽しく様子を窺う。時間も限合になり、魔理沙は目的のキノコ狩りへ。

俺と萃香と靈夢は、里に向けて出発した。

萃香と靈夢が居てくれた事もあつてか、道中の間は何も無く、俺達は普通に人里へ着いた。

人里の印象としては、知識でしか知らない筈なのに何処か懐かしさを感じた。

現代とは違い、江戸から明治に掛けての農村に見られる様な人里。確かに現代ほど豊かでは無いが、現代に無いモノも存在している。それは活氣。

現代での地域住民同士のコワコニケーションは、ほぼ皆無と言つて良いだろう。

良くても集会やイベントがある事ぐらい。

しかし、目の前に繰り広げられている光景は、色々な所で情報交換が行われ、和気藹々とした日常が繰り広げられている。

「どう？風紫。これが幻想郷の人里よ」
「はい。凄い活気に溢れていると思います」

靈夢の言葉に俺は啞然としながら答えを口にする。

「やっぱり、風紫も例に漏れず驚いている様だね」
「そりやそうですよ。俺の居た場所ではこう言つ光景は稀ですから……」

萃香は瓢箪に入つて居るお酒を飲みながら、楽しそうに話つて来た。

俺は苦笑混じりで返す。

「さて、これから富大工の所に行く訳だけど、私から逸れない様にね。これでも結構広いから」

「分かりました」

靈夢の言葉に俺と萃香は頷き、靈夢を先頭に富大工の事務所へと歩いて行く。

途中、靈夢へ声を掛ける八百屋や魚屋、果ては酒屋などの客引きを華麗に交わしながら道を進む。

暫くしてから靈夢は足を止める。

俺と萃香は後ろから靈夢の見ている建物を一緒に眺めた。

「へー、思つてたのよつこざんまりとしてる建物だね。もつと豪邸だと思つたよ」

萃香の言葉に俺も頷く。

目の前に建つてゐるのは、周囲に看板も無くこざんまりとした普通の一軒家。

とは言つても、普通に貴族が暮らす様な大きな建物なのは変わり無い。

知らない人から見たら、とても富大工が住んでいる建物には見えないだろ？。

「ここに富大工さんがいるのですか？」

「ええ、そうよ。ここの大工さんは、家と事務所を兼用してゐるから、

普通の家よりは少し大きめの建て住まいなのよ。里の住人は、事務所兼用つてのも知つてゐるし、これと言つて事務所と分かるモノを置いて無いから分かり難いとは思つけどね」「なるほどです……」

「それじゃ、中に入るわよおー」

靈夢は俺と萃香を伴つて、屋敷へと入つて行く。

「この屋敷は四方を壁に囲まれており、入り口は一箇所となつてゐる。

もしかしたら裏口とか有るかも知れないけど、正面から見た状態でそこまでは分からぬ……。

また、全体を白一色で統一されているので、何処か清楚感が有る様な雰囲気があつた。

何処と無く“城”をイメージしてしまつて階段建てのお屋敷だ。

「『めんくださあい』

門を抜けた後、靈夢は玄関の引き戸を開けながら中に居るであろう主人に声を掛ける。

玄関の中は純和風と言つた感じで、生花が客人を迎える様に配置されており、屏風が奥の部屋へと繋がる廊下を塞いでいる。

何と言つか、いつ言つ家を見るとお金持ちだなと思つのは、現代人の性なのか……。

「はいはい。ちよつとお待ちちやうさいね」

奥から妙齡の女性の声と足音がした。

足音が近づくにつれ、女性の姿が視認出来た。

女性は着物を着ており、何処かの貴族の様な佇まいを見せ、気品が溢れていた。

また顔は妙齡と思わせない程、整つており、髪はストレートで綺麗な黒色。

長さは、肩の少し下まで伸びていた。

実際の年齢は分からぬが、確実に若く見えるだろう。その女性は、俺達を確認すると、屏風の前で正座しながら座り、頭を下げながら言葉を口にする。

「こりつしゃいませ。靈夢さんとその御一行様」

言い終わった後、女性は頭を上げ、俺達に微笑む。うわあ。

凄く綺麗な笑顔だなあ。

こう言う人を大和撫子って言つのかな……。

女性の笑顔に見惚れていると、靈夢が頭を下げる。

俺と萃香も慌てて頭を下げた。

何て言うか、妖怪が人に頭を下げる光景つて、結構なレアなのかも知れない……。

「じんにちは、奥様。今日は神社の修繕を、お願いに参りました」

靈夢が頭を上げた後、目の前に居る女性に用件を切り出した。

挨拶や話の切り出し方を見ていて思ったが、靈夢は根が眞面目らしい。

それとも現代人が基本を知らなさ過ぎるのかな……。

「畏まりました。ご案内致しますので、どうぞお上がり下さい」

靈夢の言葉に奥方は更に笑顔を濃くして立ち上がる。

その立ち方も気品に溢れ、余計な動作が無く、見苦しく無い程度に着物の皺を伸ばす。

靈夢や魔理沙、萃香と言った人達の服装が何処かおかしかった所為か、着物が凄く新鮮に見える。

そう言えば、里を歩いている時に見た子供とか大人は浴衣とかが多かつたな。

一部の人は上半身が裸だつたけれども……。

ああ、何か「キャスト・オフ！」とか言って、原理が分からない服の脱ぎ方をしている男が居たな。

靈夢や萃香が何も言わなかつたけど、今考えるとアレは何だつたのだろう。

周りに女性が居て、黄色い悲鳴を上げていたけど、何かの大道芸か手品で、あの人は女性に人気がある人なのだろうか……。

しかし、服を脱いでも女性から人気を得ると言うのは凄いな……。そんな事を考へている間に、俺達は家の中に上がらせて貰う。幾分か奥へ進むと大きな部屋に通された。

どうやらそこは客間らしく、大工の主人は工具のメンテナンスを行っているとの事で、連れて来るからお茶でも飲んで少し待つていろと言う事だつた。

俺達はお茶のお礼を言つて、奥方はニコニコしながら部屋を後にする。

そんな奥方を見送つてから萃香は口を開いた。

「ふう。何か疲れた……」「まあ、あんたはそうでしょうな。何処でもマイペースだし」「それって褒められてないよね?」「さあね。……ん。」のお茶美味しい

靈夢は萃香を適当にあしりつて、自分の手前に置いてあるお茶に手を伸ばし、口に含む。

その様子に俺もお茶に手を伸ばす。

右の端に座つている萃香を見ると、ブツブツと独り言を言いながら瓢箪に口を付けてカブ飲みしていた。

自棄酒ですか……。

そんな萃香を眺めつつお茶を一口。

「おお、本物だ。これ美味しい……」

「あ、風紫もそう思つ?」の渋みと甘さの交わりが何とも言えないわよね!」

「そうですね。」のお茶は、今まで飲んだお茶で一番ですよ」

お茶の銘柄に詳しい訳では無いが、緑茶だと言う事は分かる。けど、どうしてこんなに甘みがあるのかが分からない。でも、雰囲気的に高級茶葉を使つてやつだし、」のお茶にして」のお茶ありと詰つ感じだ。

「よつ！待たせた。嬢ちゃん」

「……はあ。？嬢ちゃん？じゃなくて、靈夢と言つ歴とした名前があるんだから、ちゃんと名前で呼びなさいよ」

「あはははっ！これは失礼、靈夢嬢。ところでそちらの方々は？一人は人間じゃないみたいだが……」

行き成り襖から現れた男が靈夢と会話を開始する。

歳は見た目だが、四十路から五十路ぐらいの筋肉質で背は高め。雰囲気は裏表が無い様に感じる明るそうな人。

それが第一印象だつた。

その男が靈夢をお嬢と呼んでいるのは、何と言つか不思議だ……。靈夢と昔からの知り合いなのだろうか？

……つてか、靈夢。

大工さんには素の対応なのですね……。

「あー、私の右に居るのは萃香。鬼よ。で、左に居るのが外来人で居候中の風紫」

「へえ、珍しいな。お嬢が居候を許すなんて……」

「今までの外来人は礼儀を知らないのよ。何でこっちの知識があるのか分からぬけど、私と会つた瞬間に『腋巫女靈夢きたあー！』とか『貧乏巫女と遭遇！』とか色々言つてくるし……」

腋巫女で興奮する理由は分からぬが、貧乏巫女と言つるのは流石にあんまりだろ、それ……。

俺は靈夢の言葉に心で静かに涙する。

「あんま間違いでも無いじゃねえか……。妖怪の山にある守矢神社は博麗神社ほど困つて無いみたいだしよ」

守矢神社つて、家の近所にあつた神社と同じ名前だ。

違う世界で同じ名前の神社が存在しているなんて、珍しい偶然もあるんだな……。

その珍しい偶然である守矢神社に行つたら、奇跡の様な神隠しに合つ状態になるとは思つても見なかつたけど。

「確かにそうかも知れないけど、初対面の相手よ？普通はそう言つ事は言わないでしょ。流石の私だつて怒るわよ。最近じや呆れの方が多いけど……」

「まあ、確かにな」

「風紫に関しても最初は断るつもりだつたわよ。妖怪も人間も巣戻するつもりは無いし。ただ、風紫はそこら辺の外来人とは違つて礼儀を知つてゐるし、生活費を入れてくれた上に神社の修繕費まで奉納してくれたからね。その恩には報わないと……。まあ、行き成り自虐的な暴走に走つたのは驚いたけど」

そう言つて靈夢は笑いながら俺を見る。

俺は靈夢から田線を外し、反対を見た。

混乱していたとは言え、あれは流石に無かつたな。

靈夢からも怒られているし、今後はもっと冷静に考えないと……。とりあえず、自虐に走るのだけは止めよう……。

「あれは混乱していた所為ですよ。まさか自分が神隠しと言つが、

別な空間に入ってしまったのは俺の世界では在り得ない事ですから……

「やうね。最初は夢だと思ってたものね」

ケラケラと笑いながら靈夢は話す。

萃香を見ると、俺を見ながら瓢箪を飲みつつ一いやいやしてくる。
何て言うか、萃香つて変な所で器用だと想つ……。
俺も苦笑を含ませながら、靈夢に言葉を返す。

「まあ、今はあんな行動を起こすつもりは微塵もありませんよ。安心して下さ」

俺の言葉に「当然よ」と言つてからお茶に口をつけた。
そんな靈夢の行動を我が子を見るかの様な瞳で追つている大工さん。

本当、この二人に何があるのかな……。

「まつ、何だかんだと楽しくやつてるみたいだな」

「あら、何か勘違いしてるみたいだけど、風紫が来たのは昨日からよ?」

「ん?やうなのか?」

そう言つて大工さんは視線を俺に向けて来る。

「ええ。昨日、突如として博麗神社の境内に居たのですよ。だから行き成りの事で混乱してしまい、靈夢にも迷惑を掛けてしまつて……。お恥ずかしい限りです……」

俺は頭の後ろに右手を持つて行き、自分の頭を撫でながら答えた。

「ふーん。なるほどな。それで、お嬢。今日は神社の修復依頼だつたよな。一いちどり、慈善事業をやるつもりは無いが、その辺は大丈夫なのか?」

俺の返しに納得しながらも何か含みを残して話題を急転換させた大工さん。

「一体、何だと呟つのだ。

俺から視線を靈夢に戻し、一ヤ一ヤしながら修繕費が有るのかと言つ事を聞いて来る大工さん。

でも、嫌味がまつたくもつて感じられない。

「ええ。その辺は抜かり無いわ。これで間に合つわよね?」

そう呟つて靈夢はテーブルの上に諭吉さんを三枚だした。

靈夢はこれで間に合うとは呟つていたが、もし足りない場合は俺が出そうと思つていたので、財布に手を掛ける。

そうすると、諭吉さんの一人が靈夢の側に帰つて來た。

大工さんの手元に居る諭吉さんは一人。

「あの神社だつたら、このぐらいあれば大丈夫だ。それに、これ以上を要求しちまつたら、何処かの誰かさんに？落とされ？かねないからな」

言つて「あははは」と盛大に笑う大工さん。

靈夢は何処か不貞腐れながら大工さんに返答する。

「アレは私とは何にも関係ないわ」
「お嬢がそう思つても、相手はそう思つてくれないみたいだぜ？」
「……はあ」

靈夢は大工さんの一言で溜息を吐き、その様子を見ていた大工さんは、更に豪快に笑う。

「それで、修繕は何時から出来るの？」
「おつと。 そうだった」

靈夢の質問に居住まいを正して、真面目な職人の顔になる大工さん。

あー、 こう言つ真面目な顔も出来るのですね。

「修繕作業は明日からでも入れる。 ただ、 最初は状況の確認とかになるだろ？から、 実際の作業はその見積もりが終わつた後だな。 お

嬢の予定に合わせるけど、何時頃が良い?」

「それだったら、明日からでお願い。やつぱり、早い方がいいでしょう?」

「それもそうだ。それじゃ、明日から作業に入らせてもらひよ。もし、資金が大幅に足りない場合は、その都度、確認させてもらひよ。」

「分かったわ。それでお願い」

話が纏まり一人して笑い合う。

その後は、俺と萃香も交えての雑談が始まった。

途中から奥様も混ざり、ちょっとした宴会みたいになっていたのは、幻想郷の成せる技なのか……。

第一話 就職活動？ 一幕（後書き）

何とか今月中に投稿出来ました。

もう少し早いペースで書ければ良いのですが……。

誤字脱字など有るかと思いますが宜しくお願い致します。

次回は来月に更新予定です。

第一話 就職活動？ 三幕

- 9 -

結局、大工さんの家を出る頃には夕刻が迫る時間帯だった。
……とは言つても、里にはまだまだ活気が残つている。

俺と靈夢は、途中から出て来たお酒を付き合い程度に嗜み、この後の予定もある為、途中からお茶に切り替えていた。

萃香は自分の瓢箪のお酒を鱈腹飲んでいるのに、意氣揚々と俺の隣を歩いている。

まつたく酔つている素振りを見せないのはやつぱり鬼だからなのか……。

「さて、富大工の依頼は終わつたし、次の場所ね。この時間なら寺小屋かしら……」

少し顔を紅くさせた靈夢が俺を見ながら言つ。

その靈夢の顔は満面の笑顔だった。

よつほど“タダ”のお酒を飲めた事が嬉しかつたのですね。でもね、靈夢さん。

その笑顔は反則です。

「ん？ どうしたの風紫」

「いえ。何でも……。それより、寺小屋つて学校もあるんですか？」

またか靈夢に見惚れていたとは言えず、気になつた事を靈夢へ聞

いて見る。

「そりゃ そりゃ。里には子供達だつているんだから」「里の子供達は中々に面白いよ。あたしも一緒に遊ぶ事ある」

靈夢と萃香が答えてくれた。

「萃香が一緒に遊んでも大丈夫なのですか?」「ん? どう言う意味かな?」「いや、子供達は怖がらないのかな……と」「あー。大丈夫だよ。大人よりは子供達の方が友達さ

何處か憂いを残した様な表情を見せる萃香。触れては行けない何かを触つてしまつたのだろうか?

「萃香、何か気に障る様な事を言つたらごめん」

俺は正直に謝つた。

萃香は驚いた様な顔をしてから何時もの顔に戻り、俺に視線を合わせながら口を開く。

「ん。大丈夫だよ。今はもう、大丈夫だから。だから気にしない!」

その言葉と共にサムズアップをする萃香。

俺も萃香のサムズアップに対しても同じ様に返し、杯を交わす様に手と手をぶつける。

その際、萃香が力加減を間違つて、俺の手が壊れそうになつたのは言ひまでも無い……。

「何やつてるのよ、あんた達は……」

そう言つて呆れている靈夢も忘れまい……。

そんな事をしつつ、お店を見ながら田的の寺小屋まであと少しと言つ時だつた。

因みに、俺は求人関係の張り紙が無いかをチェックしていたのだが、靈夢達は普通の買い物をする主婦の様に野菜を見たり、今晚は何を作ろうかと相談してしたりした。

その様子を見た時は、本当に主婦じやないかと疑いかけたけど……。

いや、ある意味主婦か。

そんな事をしながら着いた先には、小さな公民館の様な木造の建物があつた。寺小屋と言つぐらいなのだから、お寺でもあるのかと思えばそうでは無かつた。

小さいながらも“学校”だった。

「お寺は何処にも無いのですね。でも？寺小屋？なのですか？」

俺は気になつた事を聞いて見た。
靈夢と萃香は口を合わせて答えた。

「霧園氣よつー！」

「霧園氣だよつー！」

「……。サイデスカ……」

一人は俺に向かつてサムズアップをしている。

それを見て溜息を一つ吐く。

その後、俺は田の前にある自称“寺小屋”を眺める。

子供達は既に帰宅しているのか、小鳥の囀り以外は聞こえない。
周りの木々達も風に揺られ、心地良く葉を鳴らし歌つている。
何とも心地の良い空間だ。

「おや、靈夢に萃香じやないか。萃香は兎も角、靈夢がここに来る
のは珍しいじやないか」

風と木々達の音楽に耳を澄ましていると、寺小屋の中から一人の女性が出て來た。

その女性は青と白より銀に近いロングのストレートの髪をしており、どうやって頭に載せているのか解らない四角形の帽子を被り、服も青と白の可愛い感じのワンピースを着ており、胸の前には赤いリボンを付けている。

スカートにはフリルが付いており、余計に可愛く感じじる。

「今日はちやんと用事があつて来たのよ」

女性の問いに靈夢は答える。

「用事？それは靈夢の隣に居る殿方の事か？」

そう言って、俺を見る女性。

Wikipediaとかゲームで見た事がある様な氣はするが、名前が分からぬ。

靈夢や萃香に関してもそうだが、Wikipedia等で見る画像とか原作の絵以上に皆綺麗だし、可愛いから一目見ただけでは誰が誰なのかがサッパリだ。

確かに幻想郷の事に関してはWikipediaで見てはいたがそこまでは詳しく述べは無い。

靈夢と女性との会話を聞きながら記憶の引出しを開け閉めしていつたが、結局は思い出せなかつた。

女性は何時の間にか俺の近くまで歩いて来ていた。

「初めてまして。私は上白沢慧音かみしらさわけいねと申す。慧音でいい。宜しく頼む」

上白沢慧音と名乗った女性は俺の前に立ち、手を差し出す。俺は差し出された手を握り返しながら相手の顔を見つめ、自己紹介する為、口を開く。

「初めまして。俺は神月風紫と申します。風紫とお呼び下さい。昨日、何時の間にかこちらの世界に入り込んでいた者です。まったくの不慣れですけど、こちらこそ、宜しくお願ひ致します」

そう言って頭を下げる。

握手していた手は既に離してある。

「なんと。外来人だつたのか。しかも昨日……」

そう言つて少し驚いた表情を見せる慧音さん。

「さうなのよ。紫が原因だと思つたんだけど、違つうらしいわ

そこに靈夢が話に混ざつて來た。

俺は黙つて靈夢と慧音さんが話す事に耳を傾ける。

「しかし、靈夢と一緒に居るとは珍しいな」

「言われると思つたわ。風紫には神社の修繕が出来るぐらいの金額を寄付してもらつたし、その恩人を突き放す事は流石の私でも出来ないわよ

「釣られたな?」

「さて、何の事やら?」

そう言つて笑いあう一人。

何て言つか微笑ましい光景だ。

俺と萃香はその様子を各自で見てはいるだけだった。

「ところで、今日は用があるとの事だつたな。ここでは何だし、家に上がつてから話を聞こつじやないか」

言いながら進路を変える慧音さん。

俺達は「分かつた」と領きながら慧音さんの後を追つた。

慧音さんの後に続きながら歩いていると、里から少し離れた位置に慧音さんの家はあつた。

理由を聞いたら何でも里の入り口に家があつた方が、何かと都合が良いらしい。

主に妖怪関係の事で。

暗黙の了解で妖怪は里を襲う事は無いらしい。

それどころか、妖怪も里を訪れ、一緒になつて買い物をしたり、コミニュニケーションを取つたりしていると言つ。

やつぱり人間に友好的な妖怪も居る様だ。

だが、稀に幻想郷に来たばかりの妖怪は里を襲うそうだ。

その為、直ぐに里を守れる様に、入り口の近くに家があると言つ事だつた。

里の外の事に関しては、時間が許す限り、見回りをもう一人と一緒に行つてはいるが、襲われる時は襲われるらしい。

ただ、ソレも仕方が無いらしく、妖怪の存在理由を明確にする為に人間を襲う……と言つたが、この場合は脅すと言つた方が正しいかも知れない。

妖怪も人間や他の？モノ？に存在を認められなければ、滅びると言つ事らしい。

更に人間をずっと食らえば、自ずと妖怪は滅亡する。

食料である人間が全滅すれば、どちらにしても妖怪側は滅亡する

しか道は残されていない。

?脅された?場合は人間もある程度、無事に里へ帰還が出来るらしいのだが、?襲われた?場合は、確実に?食われる?そうだ。

慧音さんの話だと、?襲う?のは新参者の妖怪との事。

幻想郷の妖怪にも、人間を?襲う?妖怪もいるらしいが、それで新参者の妖怪と比べれば、自重をしていると言う。

食料が居なくなると困るのは妖怪に他ならないからだ。

その辺りを分かつている妖怪は、結構いるのだとか。

だから、幻想郷は人間と妖怪のバランスを大事にしている事を、慧音さんは教えてくれた。

ここまでお茶とお菓子を摘みつつ聞いて思つた事が一つ。

それじゃ、人間は生かされているのか?と言つ事。

「そうでは無い。人間も妖怪が居ないと生きては行けないからな」「そうなのですか?そんな感じは全然しないんですけど……」

俺は慧音さんの言葉に首を斜めに折りながら疑問を投げかける。

「妖怪は人間の?負?の感情から生まれ出た物の怪だ。もし人間から?妖怪は怖い物の怪?と言う感情が無くなれば、妖怪はその時点で滅んだも一緒なのだ。だから、里の外で?脅す?事もある。それに、人間だつて妖怪と手を組んで仕事をしてしたりする。例えば重い荷物を運んだり、妖怪によるイザコザがあれば、同じ妖怪に頼んで止めてもらうとかな。後は妖怪が人間の護衛を受けたりと、そんな持ちつ持たれつの関係がちゃんとある。妖怪も人間もソレを

築けているのだ

「なるほど……」

「里に来る妖怪の中には怖いと意識的に思わせる者もいるが、心根は優しい。だから里の皆にも受け入れられる。そう言う関係もちゃんと築けているのに……」

慧音さんは急に考える様な素振りを見せる。

いや、考えているのでは無く、何かを思い出しても氣分を悪くしていふと言つた方が良いかも知れない。

そして、靈夢も萃香もだ。

「豈わん、どうしたのですか？」

俺は気になつて皆の顔を見ながら声を掛ける。

「折角、良好な関係を気付けている今を壊してしまおつとしている人間が居るらしい。詳しくは分からぬが、里で噂になつてているのだ。何かの原因で幻想郷に入り込んだ人間が、妖怪を退治しようと思つてゐるのかも知れない。そうなれば人間と妖怪の全面戦争は免れないだろう。まあ、あくまでも噂だがな。」

何とも怖い事を言つ出した。

全面戦争？

「えっと、行き成り物騒な話になりましたね……」

「幻想郷は妖怪と人間の絶妙なバランスで保たれているのだけど、そのバランスが崩れかけるのよ。そのバランスが崩れると言う事は、そう言う事なのよ」

靈夢が付け足す。

簡単に言うと、増え続けている人間側が数にモノを言って、妖怪の殲滅を行うと言う噂があるのだ。

人間にも能力を持つている人が居る。

それは妖怪でも面倒な能力だつたりするらしい。

そんな人間達が集まれば、妖怪だつて辛い戦いになると言う事だつた。

何でそんな自分達に不利益な事をするのか、俺には到底、理解は出来ないが……。

今の良好な関係があればソレで良い筈なのに、何故にソレを壊そうとするのか……。

いや、簡単な事か。

ただ自分達の平穀が欲しいだけ。

そう考えると、人間の方が卑しく感じてしまつ……。

「眞実であるうと虚像であるうと、そんな事をさせるつもりは一切無いがな……」

慧音さんはそう締め括つた。

俺を始め、部屋の中は重たい空気が支配していた。

「はいっー！」の話は口でお仕舞い！－こんなそんな事より、別な話があつて今日は来たんだろ？ほら、風紫！早く用件を話した！話した！」

先程まで黙つて話を聞いていた萃香が、場の空気を変え様と明るく振舞い、俺に話を振つて来る。

「ああ、やつだつたな。風紫、それで用件と言つのは？」

慧音さんも萃香の話題転換に乗つて来た。

でも、何で一人とも辛そう何だ？

萃香の場合は、先程の話から自分が“鬼”と言つ事に関係してい るからだろうけど、慧音さんが分からない……。

しかし、この話題を引っ張つてもしようが無いし、自分の用件を 話した方がいいかな……。

俺は一旦、靈夢の顔を見て、靈夢が軽く頷く。

靈夢が頷いたのを確認した俺は慧音さんに向き直し、言葉を口に出す。

「えつと、実は……」

俺は慧音さんに昨日から考へてゐる就職と言つて働か口の事を話した。

里の事は慧音さんに話した方が早いと、ソロに来るまでの間に言 われたからだ。

「ふむ。仕事か……」

「はい。先程も軒先等で出ている広告に募集の張り紙が出ていないか確認しながら回ったのですが、何処も人が一杯らしくて……」

苦笑しながら俺は言った。

そうなのだ。

人が多くなつていては聞いていたので、ある程度の予想は出来ていたが、募集広告がまったく無い事には驚いた。

それぐらい、人は増えていると言う事だらう。

俺は考え込んでいる慧音さんを、期待の眼差しで見つめる。

「そうだな。申し訳無いが、里での仕事は無理だらうな……」

俺の死が確定した瞬間でした……。

「マジッスか……」

俺は絶望した雰囲気を隠そつともせずに肩を落とす。

予想はしていたけど、やっぱり辛い。

「今の里は人間の数も増えているからな。何処の店も人員は足りてゐるんだ」

「じゃ、俺の働く様な場所は……」
「無いな」

ピシャリと言い切られてしまった。

俺の中には既に絶望しか残っていない。

そんな表情で、お茶を啜つている靈夢と瓢箪のお酒を呷つている

萃香を見る。

二人とも俺から目線を外した。

「里以外にも働き口つて無いですか？」

何かに縋る様に声を掛ける。

多分、無理だろうなあー。

「人間が里の外で働くのは無理だ。死んでも良いなら別だががない。

ほら、やつぱり。

俺は慧音さんから視線を外し、靈夢を見る。

靈夢は明後日の方向を見ている為、俺が見ている事に気付いていない。

「靈夢ー、じつじまじょー……」

俺の言葉に靈夢は視線を合わせる。

その表情は、困っている様な、呆れている様な、そんな微妙な表情。

ただ、その表情には嫌気と言つ感情は読み取れない。

「どうしましょうって言われても、仕事が無ければしうがないでしょ。暫くは家に居なさい」

「え？ いいのですか？」

驚きながら問いかける。

「だつてしょうがないでしょ？ 今の状態がこいつじゃ……。一人にして死なれても氣分が悪いだけよ」

そう言いながらも、何処か安心させてくれる様な笑顔を見せてくれる。

萃香もそんな靈夢を微笑ましく見ていた。

そんな靈夢の言葉に俺は目を大きくする。

「マジっすか！ ～やつた！ ～～～靈夢、大好きだあ～～～！」

俺は靈夢の言葉で嬉しくなり、場も考えずに靈夢へと飛びついた。すると、靈夢は俺の行動を予測していたのか、手を前に出して俺を抑止する。

「風紫、喜ぶのは分かるけど、その勢いに身を任せて飛び込むと、
痛い目に合つわよ?」

そんな怖い事を言つてゐるにも関わらず靈夢の表情は何処か少し笑っていた。

俺は靈夢の言葉で落着き、普通に頭を下げる。

「取り乱して申し訳ないです。でも、本当にありがとうございます。
靈夢」

「別に……。さっきも言つたけど、一人にして死なれても気分が悪いし、私にとつても風紫は恩人なのよ。その恩を忘れて野に晒す事なんて出来る筈ないじゃない……」

靈夢は照れているのか、顔を横に向けて視線を外した。

「一ん、現代人には無い初々しさと言つたが奥床しさが何とも言えない魅力を引き出している。

頭を上げた後、ボーッと靈夢を見ていたら、何やら詰まらなさそうに萃香が顔を顰める。

「まつ、風紫が一人になつたとしても、あたしが一緒にいるから心配は無いけどね」

萃香が詰まらなさそうに言つて来る。

何か萃香を怒らせる様な事をしたのだろうか……？

しかし、萃香も俺の身を案じている事に嬉しさを隠し切れず、二
二二二しながら萃香に向かい、礼を言つ。

「萃香もありがとうございます。本当に感謝しています。幻想郷に来て二人に
最初に会つたのが本当に救いだし、ありがとうございます」

その言葉に萃香も幾分か表情が和らいた。

俺は一人へと感謝を表し、もう一度、頭を下げる。

「風紫は良い出会いをしたのだな」

感慨深そうに慧音さんが言つ。

その言葉に俺は深く頷いた。

「はい！俺は本当にこの？出会い？に感謝しています。もちろん、
慧音さんもですよ。無茶なお話だったのに、嫌な顔せず相談に乗つ
て頂いたのですから」

「そう言つてもうつと助かる。仕事の事に関しては助けてあげられ
ないが、何かあつたら何時でも相談すると良い」

「はい！ありがとうございます！」

俺は慧音さんに向かつて頭を下げる。

その後は、慧音さんを含めお茶菓子を頂きながら、暫く雑談に興

第一話 就職活動？ 二幕（後書き）

早めに完成したのでこっやせて頂きました。

次回は10月にこっや予定です。

こんな作品ですが、今後とも宜しくお願ひ致します。

慧音の家を出てから暫く萃香と一人で歩いている。

靈夢は神社に戻つて仕事をするとの事だったので、本日の目的地である『香霖堂』へ萃香と一人で行く事になった。

慧音に仕事の相談を持ち出した後、所謂、お茶会が開かれていた。もちろん、お酒は無し。

別に飲めない訳では無いが、慧音が見回りを控えていた為、お酒は無理と言つ事になつた。

……と言つたか、萃香はともかくとして、靈夢はそこまでお酒を飲みたいのか？

そんな疑問を口にしたら、靈夢からは『失礼ね。飲める時に飲まないと飲めないのよ……』と返つて来た。

往来の貧乏性と言つ性の所為だろうな……。

「風紫、何をボーッとしてるの？」

「あ、いや、何でも無いです。あはは
「ふーん」

考え事をしていた俺に萃香から話しかけられる。

俺は適当に返答した後、もともと興味はなかつたらしく、瓢箪を口に付け、一気に飲んで行く。

コレも不思議だけど、中身はどうなつているのだろうか……。
そんな訳で聞いてみた。

「コレへ。」

萃香が瓢箪に指を指して首を傾げる。

「はい。中身を補充している所を見た事が無いですか」「これはね、簡単に言つと少しのお水を入れておくと、お酒が無限に出来るんだよ。だから幾ら飲んでも無くならない。どうだ！凄いだろ！」

そう言つて胸を張る萃香。

何と言つか、本当に何でも在りな世界なのですね、コレは……。
無限にお酒が溢れ出てくる瓢箪とか、現代の人間で酒好きが聞いたら喜んで食いつきそうだ……。

まあ、現代に有つたら有つたでアルコール中毒者が増えて、経済が麻痺しそうなのだけど。

「それは凄いですね。だつたら靈夢にも分けたあげればいいのに……」

「…

とりあえず納得する。

と言つた納得しておかないと後々苦労しそうだし……。

でも、そんなにお酒が湧き出るなら、靈夢にも御裾分けして良いと思つのですよ……。

「靈夢は、飲む時と飲まない時があるからね。飲みたい時にあたし
が居れば、そりや上げるわ」

「何時も博麗神社に居ると云つて居て無い」と云つ事ですか……」

「そう云つ事」

「何だ、普通に飲める環境に居るじゃないか。
心配して損した。」

そんなこんなで、色々と話をしていたら、既に目的地である『香
霖堂』の田の前に居た。

話しながら歩いてくると本当に早く感じた。

「さう、そこが『香霖堂』や。もつ、見た田からして『貯め場』と
しか思えないけど、一応、お店だよ」

萃香が『香霖堂』を指しながら紹介してくれた。

うん、本当にゴミ貯め場にしか見えない。

見せの周りには、電化製品の「ゴミばつかり」が並んでいた。

多分だけど、展示……しているのだと想つ。

中には俺の時代から何十年前と云つてテレビや冷蔵庫、洗濯機など
も有った。

他には、いのちの世界の物なのか分からぬが、看板みたいな物
や、何かの道具らしき物が色々と並べて置いてある。
これって誰が買つか……？

「うん。思つた通りの反応をしてくれたね」

「いや、コレは……ね？ 何と言つが……前衛的なお店？……ですね」「だろ？ ここは何時だつてこんな感じさ」

「どう言つて瓢箪に口を付ける。
その様子を見てから再度、お店を見渡す。
もし、この状態で黒字を出しているなら店主さんは凄い商才の持ち主なのだろ？」

「どうあえず、中に入つて見ましょうか」

俺が言つと、萃香も返事をして後に着いて來た。

「いらっしゃい」

中に入ると、店主は俺を一瞥してから読んでいた本に目を戻す。壁際には小物を飾つている棚があり、中央の商品棚には大・中の様々な道具が置いてあつた。

そして、店内から店主に目を向けると、密には興味無いと言つ感じで、黙々と本を讀んでいる。

「Jの店主、酷く無愛想だ……。

とりあえず店主から田線を外し、小物が展示されている棚へと移動する。

萃香は、中央に置かれている武器らしき物が興味あるらしく、それを見に行つた。

「あ、懐かしい、コレ」

手に取つたのはゲームボーイ。
ポータブル時代の先駆者だ。

しかし、中には何も入つていない。

電源を付けて見ても、電池の残量が無いのか、電源すら付かない。ゲーム機を戻して、他の場所へ目を向けると、ゲーム機でペットを育てるキーホルダー型のゲームや、マイナー過ぎの「H/シク等、多種多様な品揃えだ。

しかし、不思議な事に保存状態は良好だつたりする。

「ミックスを手に取つて確認するが、色褪せも無く、出版されたばかりの状態だつた。

他の電化製品も手に取つて確認するが、多少の傷が目立つ物もあるが、ほぼ新品に近い。
不思議な事もあるモノだ……。

「風紫、どう?」

「はい。俺にとつては懐かしい品物ばかりですけど、Jのうちの世界じゃ動かない物だけですね」

「やっぱりそうなんだ」

「ええ。そうですね。俺が見ていたこの箱もそうですけど、電気が

無いと動かせない道具なのですよ。うちの本は別に電気が無くて
も平気ですけど」

俺は右手にゲームボーイを持ち、左手にはマリオクスを掲げる。

「デンキ？」
「簡単に言つと原動力です。動かす為の力とでも言つのでしょうか」「なるほど」

そんな会話を萃香と話していると、何時の間にか店主が俺達を見ていた。

その表情は無表情で何を考えているのか分からぬ。
あれ？

でも、この顔、どこかで……。

その事を確認しようと萃香へ向くと、萃香は少し嫌そうな顔をしていた。

「君、ここに有る道具が分かるのかい？」
「え？ あ、はい……。まあ。」
「ふむ……」

俺が簡単に返事を返すと、何かを考える店主。
嫌そうな顔をしている萃香は、俺の側を離れ様とはせず、店主の動向を見守っている感じだ。

そんな萃香に、先程から疑問に思つてゐる事を確認しようとした

時、店主は俺に向き直して口を開いた。

「コレが分かると言つ事は、君は外来人かい？」
「あ、はい。とは言つても、まだ来たばかりの新参者ですけど……」
「そうか。私は『森近 霖之助』と言つ。君の名前を教えてもらつても？」

いきなり自己紹介を始めた店主さん。
相手が名乗つているのに、自分が名乗らないのは失礼なので、きちんと自己紹介をする。

「俺は『神月 風紫』と言います。宜しくお願ひします」

そう言つて頭を下げる。
頭を上げると、手が差し出されていた。
俺はその手を取つて握手を交わす。

「宜しく頼むよ。ここで早速なんだが、ちよつと見てもらいたい物がある」
「見てもらいたい物ですか？」

店主さんは頷き、奥へ来る様に促す。
萃香と一緒に行くか確認すると、頷きながら付いて来た。

「風紫、気をゆるしちゃダメだからね」

「え？ 何故ですか？ そんなに変な人とは思えないのですけど……」

「とにかく、あいつに気を許すと、こいつが大変な目に合つ

「風紫、気をゆるしちゃダメだからね」

「え？ 何故ですか？ そんなに変な人とは思えないのですけど……」

「とにかく、あいつに気を許すと、こいつが大変な目に合つ

「風紫、気をゆるしちゃダメだからね」

「え？ 何故ですか？ そんなに変な人とは思えないのですけど……」

「とにかく、あいつに気を許すと、こいつが大変な目に合つ

「うひひだよ…… って、萃香、君も居たのか……」

萃香と一人で話していた俺に店主さんから声が掛かる。
……と云つか、萃香の存在に今やら氣付いたのか！
鬼の存在感を蔑ろにするとか、凄すぎですよ……。

「居て悪い？」

「いや、別に」

会話が終わる。

「え、何？」

「この空気……」

何やら重いと云つか、直ぐに喧嘩が始まる様な雰囲気が周りを支配していた。

「風紫君、君はコレが分かるかい？」

その空氣を完全に無視して、俺に差し出す一つの道具。
それは武器だった。

「店主さん、コレは何処で？」

「良くて外の物が流れてくる場所があるんだが、そこで見つけた物だよ。道具の名前と何に使うかと言う事は分かるのだが、使い方がさっぱりでね。もし良ければ、使い方を教えてもらいたいのだが……」

「名前と用途は分かるのですか？」

俺は名前と用途が分かれば、使い方なんて直ぐに分かると思ったので、確認してみる。

「そうだ。名前は69式ロケットランチャー、用途は武器。僕はね、『未知のアイテムの名称と用途がわかる程度の能力』があるんだ。だから名前とかは分かるけど、使い方までは……」

なるほど。

便利なのか不便なのか分からぬ能力だ。

俺は目の前に出されているロケットランチャーを手に持つてみる。日本生まれの日本育ちである俺に武器の使い方なんて分かる訳がない。

だから、正直に店主さんへと話す。

「コレは人を殺す為の武器ですよ。俺も使い方までは分かりません。だけど、この武器に安全装置みたいなモノが付いている筈ですので、それを解除してしまえば使える筈です」

「そうか。使い方が分からないなら仕方が無いな……」

少しガツカリした様子でロケットランチャーを仕舞う店主さん。俺は少し気になる事があったので、ロケットランチャーを仕舞つている店主さんへ質問する。

「店主さん、それと似た様な武器を誰かに売つたりしましたか？」

「……何でだい？」

「いえ、少し気になつただけですけど……」

不思議そうな顔をしている萃香と店主さん。

武器の説明をしている時、萃香は他の商品らしき物を見ていたが、俺の声のトーンが少し下がつた事が気になつたらしい。

「済まないが、コレでも道具屋の店主だからね。密の情報は教えられないよ」

「そうですか。分かりました」

俺はその答えを静かに受け入れた。

店主さんの顔は無表情に見えるが、少しばかりそれが崩れた。

ちゃんと客の事を考えているあたりは商人かと思ったが、あの表情と答え方は、暗に売ったと語っている。

もし、本当に売つてなければ、『売つてない』と答えれば良いだけだ。

それを『教えられない』と言つ言葉と、一瞬、苦虫を噉み潰した様な表情を見れば、何となく想像は付く。

とりあえず、警戒はしておくか。

行き成り撃たれても嫌だからな……。

それと、慧音さんに聞いた噂も気になるし、用心して置く事に越した事は無い。

「次はコレを見て欲しいのだが、コレは……」

その後も幾つかの商品を見せられ、使い方を教えては次の商品を見せられる、と言つ繰り返し作業が続いた。

店主さんも徐々にテンションが上がつて来たのか、無表情の顔が段々と好奇心ばかりの少年みたいな顔になつている。

萃香も途中までは物珍しそうに商品を見ていたが、飽きたのか、店主さんが座つていたイスに腰を掛け、瓢箪の中身を飲みつつ、ボーッと見ていた。

そして本日の最後の商品である布団叩きを説明し、商品の品評会は終わつた。

外は既に暗く、靈夢も夕食を作り終わつてゐるであらひつ時間。萃香は既に寝てゐる……。

「いや、今日は本当に助かつた。もし良ければ、また来てくれないか?」

何かをやり遂げた表情をしながら店主さんは言った。
大して俺は疲れた事を隠そうともしないで、返答する。

「別にかまいませんが、里にも外来の方は沢山居るでしょう?」

「そうだが、殆どの外来人は気味悪がつて来てくれないのだよ。来てくれる外来人も少數だけだしね」

「まあー、こんな店内で外見がアレですからね……」

「君も言うね……」

当たり前だ。

あれだけ色々な物を見せられて、尚且つ、説明を要求させられた身にもなつて欲しい……。

嫌味の一つや二つは言いたくなる。

因みに、品評会を行つている最中、店主さんはある程度、色々な表情を見せてくれた。

最初、何であんなに無表情なのかを聞いたら、大体のお客さんは、一回きりで後は来ないのだそうだ。

店の中にも二分居るか居ないかだと言つ。

だから、愛想を出してやる事も無いとハッキリと言い切つた。

それは商人として問題が有ると思うが、口にはしない。

「でも、ここは俺の知らない物も沢山あつて面白い物もありますから、時間を見つけてまた来ますよ」

「それは有り難い！お礼に給金は出せないが、良い物を見せようじやないか」

「良い物……ですか？」

「ああ、これさ」

そう言つて出されたのは日本刀。

鞘から刀身を出す。

鍔の所に彫られている名を確認した。

「い……、コレって……！」

「どうだい？ 見た所、武器を持つて無いみたいだからね。護身用に一本上げようじゃないか。ちなみに、研磨は僕がしておいたのさ」

何処か偉そうに語る店主を無視して、刀を見回す。

とても綺麗で刃こぼれ一つ無い。

店主が刀を研いだと言つていたが、その技術も半端じゃない。まるで新品だ。

そもそも、この刀自体が持つ力なのかも知れない。

「これ、本当に貰つていいのですか？」

「ああ、今日の給金だと思つてくれ」

「ありがとうございます！－マジで大切にします！－」

「そこまで喜ばれると、一いつも嬉しいよ」

俺は名刀・小狐丸（こぎつねまる）を大事に抱え、思いつきり頭を下げる。

今の日本では所在が分からなくなっている名刀だ。

まさか、この名刀が幻想郷にあるとは思いもしなかつた。

初めての給金だし、大事に使おう。

俺は心中でそう決意した。

因みに、刀マークじゃないよ？

本当だよ？

偶然、知っている名刀だつただけだよ？

……、って俺は誰に言い訳してるのだ……？

「あ、ところで話は変わるのですが……」

刀をベルトへ差し、固定した後、店主さんを見た時から思つていた疑問を投げかける。

「今日、里に居ましたよね？」

「うん。用事があつて、里には出かけていたけど？」

「その時、何で脱いでいたのですか？しかも女性の前で……」

「あの光景を見ていたのか。参つたな……」

店主さんは少し照れた表情をした後、口を開いた。

「アレは里にある大きな道具店から帰つた後だつたんだけど、どう言つ訳か女性に囲まれてしまつてね。早く帰りたかったし、一々言葉で言つのも面倒だつたから、服を脱いで女性を遠ざけ様と思つたら、逆に何か喜ばれてしまつてねえ」

あ……、あれ、大道芸じやなかつたのか……。
店主さんは、頭を搔きながら話を続ける。

「仕方が無いから、そのまま裸で逃げる様に帰つたのさ。その時、女性達が『噂通りよー』と騒いでいたのが気になつたけど、何だつたんだろうねえ」

……。

普通、裸のまま帰るか？

やつぱり、この人は何処かおかしい……。

靈夢や萃香が『癖がある』と評価していたのが分かつた気がした。

「そのまま無視して帰れば良かつたじゃないですか？」

「やつぱり、何かをして帰つた方が心象的にも離れてくれると思つて……。結果は散々だつたけどね。しかし、やつぱり服は着ない方が動きやすいな。今も窮屈で仕方が無い……」

うん。

馬鹿だ、この人。

常識を分かつていてるのに、何故そう言つ考へに至るのだろうか……。

普通にしていればカツコイイし、それなりにも人気が出るだろうに……。

あ、人気は有るのか。
変な意味で……。

「まあ、分かりました。何で服を脱いでいたのかと言つ疑問も解決しましたし……」

困ります……と続けようとしたら、人の話を聞かないで勝手に脱ぎ始めた店主さん。

風呂以外で男の裸なんて見たくなえ！！！

と詰うが、どう詰う原理で脱げて行くのだ？

服の方から身体を離れていく様な錯覚をえ覚える。店主ちゃんの服が全部脱ぎ終つる前一、何やら重い

店主さんの服が全部脱が終わる前に、何やら重たく鉛し音が響いた。

擬音にすると、「ジゴホー」という感じだらうか。その音を境に、店主さんは前のめりのまま倒れていった。俺の方へ倒れて來たので、俺はそれを避ける。

「危なかつたね、風紫」

先程まで寝ていた萃香が犯人だつた様だ。

自分の手枷である鉄球を店主さんの頭へとぶつけた様だつた。

「だから、油断したらダメだつて言つたじやないか。服を脱ぐ様な話題を振ると、絶対に脱ぐんだから」

「そ……そつなのですか。今度から氣をつけますね。もう、男の裸は見たく無いですしね。それにしても、助けてくれてありがとうございます」

「だつて、あたしは風紫のガードなんだからねー！」

そう言つて笑う萃香。

俺は「ありがとう」と返すと、ブイサインをしながら瓢箪に口を付け、美味しいそうに飲み始める。

何と言つか、店主さんは癖がありすぎだらう。

まあ、ともあれ、成仏して下さい。

そんな事を思いつつ、手を合わせて祈る。

「ほ…僕はまだ死んでない……」

あ、また氣を失つた……。

「さて、帰らうか、風紫。靈夢も夕飯を作つて待つてるかも……」

「そうですね。帰りましょうか。それじゃ、店主さん、また来ますね」

聞こえていないであらう店主さんに向つて声を掛けると、俺と萃香は外に出て帰る方向に歩く。

外は既に夜の空気になつており、月明かりと星々の明かりを頼りに道を歩く。

一人で暫く歩いていたら、萃香から声が掛けられた。

「風紫、ちょっと我慢してね。このままだと遅くなるから……」
「く……ってうわあ……」

「く……ってうわあ……」

萃香は俺の腰を軽々と持ち、空中に浮き上がる。

俺は驚いて声を上げてしまつたが、徐々に高度が高くなると、他の所も見えて来た。

里からは光が漏れ、煙が上がり、それぞれの家庭での団欒が始まっている。

山の方に目を向けると、所々に明かりが見えるが、その明かりが移動していると言う事は、何かが移動していると言つ事だろ？

山の頂上には博麗神社とは違う神社が見える。

あれが大工さんの言つていた守矢神社だろ？

今度、機会があれば行つて見よう。

何だか単なる偶然にも思えないし……。

「凄く気持ちが良いですね、萃香」

「そうだろう？あたしも飛んで散歩するのが好きなのさ。風紫も飛べる様になればいいのにね」

「あはは。流石にそれは無理ですよ」

「そんな事無いんじやない？靈夢も飛んでるし
「言われてみれば……」

萃香の言葉に苦笑しながら答える。

流石に普通の人間が飛ぶ事は出来ない。

でも、靈夢が飛んで神社に戻った時は盛大に驚いたな。

一瞬、靈夢も妖怪なのかと勘ぐってしまったが、今思つと、かな
り失礼だよな。

「ま、飛べる様になる薬を作れそうな薬師は知つてゐるから、今度、
そつちにもでも行つて見ようか」

「ははは……、機会があつたらお願ひします」

本当に何でもありなのな……。

人間が飛べる様になる薬つて凄すぎるだろ……。

そんな下らない話をしながら博麗神社を目指す俺達。
暫く空の散歩を楽しんだ所で、何かが俺達に向つてくる気配を感じる。
じる。

気になつたので、萃香に確認して見た。

「萃香、アレ何ですか？」

「ん? どれ?」

「山の方からです。黒くてカラスみたいなのが飛んで来るのですが

……

そう言つて、萃香は俺が指を指した方向を見る。

そして、萃香が答える前に、その物体は目の前に居た。

……つてか、早つ！

「清く正しく射命丸文、ただいま登場ですっ！」

「文か……。何しに来たの？」

どうやら知り合いらしい。

最初、鳥だと思った物体は、羽根付きの女性だった。白いブラウスに黒いスカート。

頭には天狗の想像図で良く見る帽子を被つており、一本足の下駄と言つより一本足の靴を履いていた。

「何つて取材ですよ?」

「誰の?」

「妖怪と仲良くしたいと言つているこの人間です」

「誰から聞いたの?」

「魔理沙からの情報ですっ!」

萃香は呆れた様な溜息を一つ吐く。

と言つて、俺の取材つて、この方は記者なのか?

「今は帰つてる途中だから、明日にしてくれないかな……」

「だったら、私も一緒に付いて行きます!!」

「靈夢が怒るよ?」

「怒られても取材を続行するのが、新聞記者ですからー。」

深い溜息を漏らす萃香。

やつぱり、この人は新聞記者らしい……。

何を言つても無駄の様なので、自己紹介などの会話を交えながら、一緒に博麗神社へと移動した。

「今度はあんたか……」

博麗神社に着いた俺達を見た靈夢は、呆れた表情をしつつ頭に右手を置きながらの一言曰だつた。

「ただ今戻りました」

「戻つたよー」

「おじやましますつー.」

三者三様に言葉を返す。

靈夢は呆れた表情を戻し、皆を連れて居間へと移動する。

俺は話しながら移動している二人の背中を見ながら、一緒に移動するのだった。

第一話 就職活動？ 四幕（後書き）

一話が本当に長くて「めんなさい」（汗）
今回は香霖堂の店主さんが絡むお話でした。
ある意味強引過ぎたかもしません。
以後、気付けます。

そして、本当に今更なのですが、このうちはキャラ崩壊が含まれる事があります。

と言つたくなります。
なるべくそうならない様に書いていますが、キャラ崩壊がおきてる場合は、広い心で見て頂けると嬉しいです。

また、次回の内容は本当に好き勝手にやつています。
物語上、必要な事だとは言え、贊否両論あるかも知れません。
それも広い心で見て頂けると助かります……（汗）
そして、東方の雰囲気を壊さない様に頑張ります……（滝汗）

次回予告 ↗ Next Story

第一話 就職活動？ 終幕

「風紫さんと入りますから、お先にどうぞ」「ぶつぶつううう！……」

俺は自分で認識した瞬間、お茶を盛大に噴出した。
十月中旬～下旬公開予定……。

- 11 -

僕は今、靈夢達ど^ー飯を食べています。

靈夢ど^ー飯を食べる時つて、必ず誰か居ます。

まあー、まだ一日田の夜ですから、必ずと言ひ訛では無^ーのだけ
ど。

とりあえず、萃香は別に良いのですよ。

僕のボディーガードをしてくれていますから。

でも、何で新聞記者がいるの？

僕が取材されるらしいけど、ただの人間だよ？

まあ、答えは俺の所為だつたりするのだけど。

自業自得とも言つね……。

「はふう。やつぱり靈夢さんの^ー飯は美味しいですね

お味噌汁を飲みながらしみじみと語る彼女は“射命丸文”さん。俺が萃香に抱えられて博麗神社へ飛びながら戻つて来る最中、空で遭遇したのだ。

その際、俺達は飛びながら自口紹介を済ませていた。

文さんは、何でも幻想郷一の新聞記者らしい。

あくまでも文さんの自称なのだけど。

因みに、最初は射命丸さんと呼んでいたのだが、余りにも舌を噛みそうだったので、名前で呼ぶ事にした。

その際、「あれ？ もしや、私に一日惚れですか？」と笑いながら言わされたので、試しに頷いたら、顔を赤くして文さんが黙り始めてしまった。

……と言つたが、名前を呼ぶイコール一田惚れと言つ理論は何処かおかしくないか……？

「いや、文さんって、普通に綺麗で可愛いし、一田惚れしてもおかしく無いと思うのですよ」

「えう！えつと、あ、あの。その。ありがとうございます。でも私、何時も邪魔扱いされているので、その……、そんな事をハッキリと言われた事なくて……。えつと。その。まずはお友達からで……」

そんな感じで、マジに取られそうだったので誤魔化そうとも思つたが、折角なのでそのままに。

折角、友達になつてくれると言つて居るし、それなら何も問題はない。

閑話休題……。

文さんが俺に近づいたのは、勿論、取材の為。
何処からか噂を聞きつけて、実際に俺を見に来たとの事だつた。
噂の出所は……、考えなくてもあの人しか居ないだろ？
文さん本人も彼女から聞いたと言つていたしね。
それに、俺の事を知つてるのは限られるのだから……。
本当だつたら少し取材して帰る予定だつたらしいのだが、俺の発言の所為で、現在は皆で夕飯を一緒に食べている。
しかも、昨日と今日の朝は俺の隣に萃香が座つていたのだが、今は文さんが座つている。

萃香は靈夢の隣で山盛りのご飯を食べつつも少し不機嫌なご様子。

あ、五杯目に手を出した……。

……、自棄酒の次は自棄食いか？

「文、あんたは何で」）飯まで一緒に食べてるのよ？まあ、美味しいと言われて悪い気はしないけど」

「そうだよ。風紫の隣は私の指定席なんだよ！」

「そんな事、何時から決まったのよ……。と言つか、あんたも自分の家でご飯食べなさいよ……」

「いいんだよ。あたしは風紫のガードだから。あたしの食費も風紫が出してくれるさ！」

そんな事を言つた萃香は目を輝かせながら俺を見る。

その目を見ながら溜息を一つ吐き、財布を取り出して靈夢へ諭吉さんを一人渡す。

「靈夢、コレ萃香の食費でお願いします……」

「別にかまわないわよ。それに、風紫のお金だつて無限じゃないでしょ？何かあつた時の為に残して置きなさい。それに、言つたでしょ？風紫には数ヶ月先の分まで食費を貰つてるつて」

「でも……」

「大丈夫よ。風紫が心配する事じゃないわ」

靈夢はお味噌汁を片手に微笑む。

「さつすがー靈夢は分かつてるねーー！」

俺と靈夢のやり取りを見ていた萃香が言う。

その笑顔は、正に計画通りと言う悪人みたいな笑顔だった。

ただ、一瞬で元の無邪気な笑顔に戻ったのだけど。

靈夢はその言葉に「はいはい」と適当に相槌を打ち、沢庵を一切
れ摘み、食べる。

「風紫さんって、意外とお金持ち？」

「そんな事は無いですよ。幻想郷に入った日、ちょうど給料日だったのですよ。それで、現金を手にした所で幻想郷に入ってしまったので、お金がある様に思つだけです」

現金を仕舞う時に俺の財布を見た文さんの質問に答える。

その回答を聞いて、文さんは何かにメモを取り始めた。

メモ帳の中身を見た俺は感心する。

至る所に付箋が張つてあり、色々な事が事細かに書かれていた。

「やつぱり、記者らしくはしているのですね」

「らしく…は酷く無いですか？コレでも？文々。新聞？の記者ですか
からね」

そう言つた文さんは、豊満な胸を張り、元々大きい胸が余計にで
かく見える。

俺の視線に気付いた靈夢が札を一枚、俺に向つて投げながら注意
を促す。

「風紫、鼻の下が伸びてるわよ……」

「え？あ、その、『めんなさい……』」

「別に大丈夫ですよ。ただ田の前がねえ」

その言葉に文さんの前に居る萃香を見ると、文サンの胸を涙目で

睨んでいる。

そつちかよ……。

「まあ、萃香さんには無いモノですからねえ」
「むう……」

文さんは自分の胸の前で両手を交差させた後、胸の下に交差させた腕をもって行き、自分の胸を高々と掲げる。

えーっと、これ以上、萃香を煽らないで下さい……。

寧ろ、天狗つて鬼には頭が上がらないのでは無かつたのですか？文さんと萃香を見ていると、その噂が嘘だと思えるぐらいに仲が良いけど……。

しかし、今の萃香は瞳から涙が溢れそうだった。

そんな萃香が自分の胸を見て更に涙を濃くする。

これはフォローした方がいいのかな……。

「萃香、男の俺が言つのも変ですけど、胸の大きさは個性ですよ。そんなに落ち込まないで下さい」

「へー、じゃあ、風紫は大きい胸と小さい胸のどっちが良いの？」

そこに食いつくか！？

靈夢に質問されて、俺は顔を熱くした。

「いつ言ひ話題に慣れていなかりだ。

女の子つて、やっぱり胸の大きさに拘るのかな……。

「俺は俺を好きになつてくれた人の胸が好きですよ。まあー、向こうで付き合つた経験なんて無いので、どの胸がと詰つ前に母親以外の胸なんて見た事がないんですけど」

恥ずかしさを隠す為、言葉にした後、ご飯を口へと持つて来る。その後は、おかげを口に頬張り、皆の顔を見ない様にした。確実に顔は赤くなつてゐる筈だし……。

「風紫さんつて、女性経験無いんですか！？」

「……、悪かったですね……」

文さんが驚いて眼を大きく開けている。

そして、すかさずメモを取つていた。

それを見て俺は慌ててメモ帳を取り上げ、メモする事を止める。

「文さん、プライバシーは守らないと……

「ううつ、分かりました……」

そう言いながらメモ帳を文さんへと渡し、文さんは少し落ち込み

ながらもメモ帳を仕舞う。

その後、魚の焼き物を穿り始めた。

他のメンバーは何故かニヤニヤしていたが、あえて突っ込まない。

「きっと、風紫を気に入ってくれる人も現れるんじゃない?向こうの女は見る眼が無さそうだし、もしかしたら、幻想郷で結婚しちゃうかもよ?」

「そうですね。もし、向こうで結婚が出来たら、俺はその子を、一生を掛けて守りますよ。何処まで出来るか分かりませんけど。でも、きっと向こうと変わらずモテる訳が無いですよ。外見や顔がいい訳でも無いですから」

そう言つて苦笑を漏らす。

そして、側にあるお茶を飲みつつ、皆を見たら、って、あれ?

「みんなー。おーい?どうしたのですかあ?」

俺の言葉に皆が意識を戻す。

俺、何か変な事を言つたかな……。

「風紫さん、近いうちに絶対そう言つ女の子が現れると思いますー。」

「はあ、ありがとうござります……」

突然、文さんが身を乗り出して、言つて來た。

俺は生返事を文さんへ返しておく。

彼女居ない暦イ「ホール年齢が、そこまで力強く同情されるとも思つて無かつたけど……。

その後、俺達は取りとめの無い会話を繰り広げ、俺と靈夢は一緒に食器の片付けを行つていた。

萃香と文さんはその間に将棋を始めており、時折、台所に文さんの「待つた」の声や、悩む声が聞こえて来る。

どうやら文さんは萃香に押されているらしい。

俺と靈夢は食器を片付けた後、お煎餅を持ち出し、新しい茶葉を出してお茶の準備をする。

お湯を沸かしてから居間に戻ると、文さんが手を床に着け、頭を下げていた。

どうやら、将棋は萃香が勝つた様だった。

「さてさて、お一人ともお茶は如何ですか？」

「あ、頂きます」

「あたしもーー！」

俺の言葉に将棋を片付け始める一人。

靈夢はお風呂の準備をするとの事だったので、俺も沸かせる様にやり方を教えてもらう為、居間に一人を残し、俺と靈夢は外へと行つた。

お風呂の外側には薪が用意されており、この薪を使ってお風呂を沸かすらしい。

俺は靈夢に言われて、井戸とお風呂を往復し水をお風呂へ入れて行く。

お風呂へ水を入れ終わった後、靈夢の場所へと移動する。

靈夢は既に薪に火を入れており、時折、木が跳ねる音がする。

闇夜に燈る炎は、淡いオレンジ色をしており、靈夢の顔に綺麗な光が当たり、とても幻想的な情景を映し出していた。

俺はその様子に見惚れつつも、靈夢へと声を掛ける。

「水、入れ終わりましたよ」

「そう。ご苦労様。一人の場合は先に水を入れてから薪を燃べて頂戴。そうしないと、お風呂が焦げちゃうから」

「了解。しかし、薪の匂いと木が弾ける音は、何だか落着きますね」

「そうね……」

その後の俺達は炎を見ているだけで会話らしい会話は無かつた。田の前の炎は、ほの暖かい熱を俺達へ向け、煙は天まで届く勢いで上っている。

そんな光景をボーッと眺めていたら、靈夢から声が掛かった。

「風紫、幻想郷の一日田はどうだった?」
「では生活して行けそう?」

「そうですね。やつぱり俺がいた所とは全然違いますし、結構、驚きの連発でした。仕事が無いと聞いた時は本当に死を覚悟しましたけど、靈夢や萃香、それに慧音さんに文さんに魔理沙、そして香霖堂の店主さんとお知り合いになる事が出来ましたからね。幸先は上々と言う所じやないでしょうか」

「そう、良かつたわね」

「はいっ! それと靈夢には本当に迷惑を掛け放しですけど、これからもどうか、宜しくお願ひします」

そう言つて靈夢へ頭を下げる。

靈夢の表情は分からない。

でも、靈夢と萃香に拾つてもらわなければ、俺はこうして生きている事が出来ないのも事実だ。

その事を考えると、俺にとって一人は命の恩人。

そう思つと、頭を下げるには居られなかつた。

「あ、もちろん仕事が無いのであれば、自分で仕事を考えてお金をちゃんと稼ぐ様にするので、『安心下さ』……ちよつち、時間は掛かると思ひますけど……」

言いながら頭を上げ、苦笑しながら靈夢を見る。

靈夢の表情は子供を見る様な慈愛の表情をしていた。

いや、それ以上に何かを感じるのだが、言葉では表現が難しい……。

「期待してゐるわよ。風紫」

「了解！」

靈夢は微笑み、その微笑みに答える様に俺は元気に言つた。

靈夢の微笑みは本当にとても綺麗だつた……。

俺と靈夢が部屋へ戻ると、萃香と文さんは囲碁に興じていた。

囲碁のルールは分からぬが、萃香が訝しい顔をしていると言つ事は、萃香が劣勢なのだろう。

そんな真剣勝負の最中に靈夢は俺と自分のお茶を入れながら、二人へ言葉を投げ掛ける。

「二人とも、お風呂も沸いた事だし、先に入つて来たら?」

靈夢の言葉に、囲碁の盤に向けていた視線をそのままに二人は同時に返事を返す。

「あ、風紫と入るから先にいいよー」

「風紫さんと入りますから、お先にどうぞ」

……。

は?

この一人は今、何て言った?

一緒に入るだ……と!?

「ぶつぶつううう……」

俺は自分で認識した瞬間、お茶を盛大に噴出した。良かつた。

靈夢の隣に座つていて……。

まあ、俺は盛大に咳き込んでいるが……。

「あんた達バカじやないの? 風紫は男よ?」

「靈夢さんのお口通りだ！」

お茶を噴出した所為で咽たので、サムズアップを靈夢へ向ける。
萃香は何となく言いそつだから分かるけど、何で文さんまで……？

「私の背と体系だったら、親が子供を入れてる感覺だから大丈夫だ
つて！ー！」

「そんな問題じゃ無いと思います、萃香さん……。

寧ひ、貴女の方が、俺よりずっとずっと年上じゃないですか……。

「私は何となくです。それに取材もありますから。あと人間の男と
入っても気にしませんし」

「俺が気にするわつ！」

君達、俺が女性経験無い事を良い事に、俺を玩具にするつもりだ
らう……。

「そんな事は無いですよ？
「そんな事無いよー」

俺の疑問が表情に出ていたのか、それとも俺の心を読んだのか、
何故か同じタイミングで返事をする一人。

でも、その表情と言うか視線は空を泳いでいる。

滅茶苦茶バレバレです……。

「あー、二人共」

そんな視線が挙動不審になつてゐる一人に声を掛ける。
因みに靈夢は、お茶の御代わりをしていた。

「いいですか。俺は男です。そんな俺が萃香や文さんと一緒に入つたら、理性が働かなくなるかも知れません。それは女の子として、非常に拙いと思うのですが……」

「いや、俺が理性を無くしても一人なら俺を簡単に殺せる事も知つているけど、一応……ね？」

と言づか、まだ死にたく無いから、理性を吹つ飛ばすと言つ事がありえないのだけど……。

「別に風紫さんなら、かまわないですけど?ねえ、萃香さん」

「文の言つ通り!」

「あんた達は……」

呆れる靈夢。

ニヤニヤと笑つてゐる萃香と文さん。

「どうちにしてもダメですよ。一緒に入るなら靈夢と入って来て下さい！」

「私は一人でまつたりと漫かりたいから、私はバスよ」

俺の提案に靈夢は右手をパタパタと振りながら拒否反応を示す。萃香と文さんは渋っていたが、最後は納得してくれた。と言うより、多分、玩具にするのが飽きただけだろうけど……。はあ……。

その後は結局、萃香と靈夢が一緒にお風呂へ入る事になり、二人はお風呂場へ移動した。

居間に残されたのは、俺と文さんだけだった。

俺は文さんの湯呑みにお茶を入れ、零さない様に渡す。

「文さん、お茶、どうぞ」

「ありがとうございます」

大して会話も無く、黙々とお茶を飲む。

この静けさが何とも言えない空気を醸し出す。

普段の俺だつたら、会話を探す事で必死になつていてるだろうけど、今は何とも心地の良い空気だ。

お茶を一口飲んだ後、小さな溜息を吐く。

それが合図となつたのか、文さんが俺に顔を向け、口を開く。

「風紫さん」

「はい? どうしたのですか。そんな真剣な表情になつて……。もしかして取材……ですか?」

「いえ、それでは無く……、いや、それもしたいのですけど、今は別の話です」

「取材はしたいのか……。
でも、別な話って一体何だらうか？」

「別に取材される程の人間じゃないですよ？俺……」

「とりあえず、取材をされる覚えが無いし、普通の人間だから面白みが無いと言う意味を込めて、文さんへ言つてみた。」

「そんな事ありません。風紫さんは面白い人ですし、密着していたら、面白いネタに当たりそうですからね！あ、コレは記者と女の感です！」

「そんな感は外れて欲しいです……。俺は普通の生活がしたいですしね」

「そう言って苦笑する。

「自分からトラブルに巻き込まれる気はそちらありません。
しかし、文さんの表情は笑顔からまた、真剣な表情へと戻る。
何だろ、一体……。」

「まあー、それは良いんです。私は記者だし、嫌がられても付いて行くだけですから。でも、正直、風紫さんには嫌われたく無いです

.....

「文さん？」

え？

何？

何なの、Jの空氣.....。

と言つたが、何か文さんが凄く可愛く見えるのだナゾ.....。

「その？文さん？では無く、？文？と呼んでもいいませんか？」

「はい？」

「私は、本当に初めて綺麗で可愛」と言つてもいたしました。本当に嬉しかつたんです。やっぱり普段は迷惑がられていましたから.....

待て待て待て待て待てっ！

おかしいだろ！？

文さんの冗談で言つた言葉のノリで俺が言つた言葉がここまで影響を及ぼすなんて、ありえないって！

と言うか何故こうなる.....？

「それで、風紫さんに興味が湧いたのも事実で.....」

「風紫。敬称や敬語なんていりませんよ。文

「え？」

とりあえず、俺は文の言葉を遮つて自分の言葉を出す。
これ以上の言葉を聴いたら、何かダメな気がする。

だから、言葉を遮つて強制的に話題を変えた。
もし俺の言つた事が原因だつたら尚更だ。

「別に密着取材をされたからと言つて、文を嫌う道理がありません。
だから、そんなに考え込まないで下さい。それに俺は自分の言つた
事に嘘は無いと思います。他の人がどうであれ、俺は綺麗で可愛い
と感じたから本音を言つただけですよ。言つた筈ですよ? 一回惚れ
しても可笑しくないって。そんな人に密着されるなら、こちらから
お願ひしたいぐらいです」

「本当ですか! ? ありがとうございます! ! !
「いえいえ。それぐらいお安い御用です!」

綺麗で可愛いこと言つのは本音だし、別に問題無いよな……。
それに、文も俺と一緒に行動すると言つなら、俺の危険も少なか
らず遠くなる。

コレも持ちつ持たれつだよな……。

ただ、噂一つであつちこつちに飛びぐらいだから、後々が大変そ
うだけ……。

文は俺の言葉に両手を挙げて喜んでいた。

取材の許可が取れた事に対して、そんなに嬉しいのだろうか……?

「ただ、二つだけお約束があります」
「何なりとつ!」
「プライベートに関しては記事にしないで下さい。後、記事は推敲
する時に必ず見せて下さこね」
「分かりました。それはお約束します!」

あれ？

すんなり約束出来ちゃった……。

推敲に関しては『言論の自由が……』とか言われると思つたけど

文は落ち着かない様子で、メモ帳へ書き込みながら、ブシブシと独り言を言つている。

今度の記事のタイトルだらうか、そんな感じの独り言だった。そんな文を見ながらお茶を飲んでいると、笑顔のまま文が俺に顔を向けた。

「あ、風紫。私は貴方の事を諦めるつもりは無いわよ？貴方は話題転換で話をずらしたつもりでしようけど……。気の早い女と思われるかも知れない。だけど、それでもいい。だって私は、本当に貴方が好きになつたみたいだからー。覚悟しなさいな、風紫。妖怪は執念深いわよ」

そう言つてウインクを一つ。

そのセリフを聞いた俺は湯呑みを口につけたまま固まる。

「ふふふ。さて、そろそろ靈夢達もお風呂から上がる頃だし、お風呂に入つてくれるわね」

そう言つて、文はお風呂へと移動する。

俺は相変わらず固まつたまま。

いじなつた原因を考えるが、やっぱり出会い頭の一コマと先程の

やり取りだらうか……。

自分で地雷を踏んだ?

いや、アレだけで“好き”と言われ……。

“好き”?

あれ?

人間にモテ無い俺が、妖怪に告白された?

え?

遅めのモテ期?

えーっと。

とりあえず、人生で初めて告白された……。

そう自分で認識すると顔が異常に熱くなる。

「何ですかおおおおおおおお……！」

俺は口を付けていた湯呑みをテーブルに置きながら呟く。

「煩いわよつー！」

靈夢の札が頭へ飛んで来る。

「あ、すみません……」

その痛みである程度の冷静さを取り戻し、口の渴きを潤す為にお茶を飲む。

「何があったのよ？文は凄く『機嫌だつたし、戻ればあんたは顔を真つ赤にして叫んでるし……』

聞いてくる靈夢の顔はニヤ付いていた。

絶対に何かを確信している顔だ……。

「いや別に。ちよつと考え事をしていただけです……

「ふーん」

……。

まだ顔がニヤけている靈夢。

くつそ。

静まれ、俺の顔！

「まあー、何があったかは聞かないけど、ちゃんと備えて行動しなさいよ……、じゃないと、私も本気出せないし」

「え？ 最後、聞こえなかつたんですけど……」

靈夢の声が段々と小さくなつて行き、最後は殆ど聞き取れなかつた。

俺の言葉に靈夢は微笑を一つ浮かべ、「何でもないわよ」と言いつながら座り、お茶を求めて來たので、俺はお茶を注ぎ、靈夢へと渡す。

靈夢はお礼を言いながら湯呑みを受け取り、美味しそうに飲み始めた。

その様子に何処か優しい気持ちが込み上げる。

俺は自分の席を立つて、自分と萃香と文の布団を敷きに部屋を出る。

居間へと戻った後、文と萃香がお風呂から上がっていたので、お茶を渡してからお風呂へ向づ。

萃香つて意外と長風呂らしい……。

お風呂は檜を使ったお風呂になつており、檜特有の香りが室内に充満していた。

昨日は手拭で身体を拭いただけだったので、お風呂に浸かると、とても気持ちが良かつた。

今日の疲れと昨日の疲れが、一気に溶けて行く様な感覚が全身を包む。

きっと、檜の香りも手伝つてリラクゼーションの効果を最大限に引き出してくれているに違いない。

お風呂を上がつた後は居間に戻り、靈夢が花札を出したので、四人で話しながら花札勝負。

もちろん、花札なんて物は初めてやるので、何回やつても俺が最後だつた。

時間も頃合になつたので、それぞれが各自の部屋へと移動する。

自分の部屋に戻つた俺は、今日の事を振り返る。

仕事に関しては絶望を味わつたが、こうなれば自分で起業するしかない。

今度からはソレの準備に向けて動く事なる。

慧音さんの家から帰る途中に思いついた事だが、一応、何をするかは決めている。

文と萃香も居るのだ。

その一人が居るなら出来ない事では無い。

二人にはまだ許可を貰つていないが、話すだけ話してみよう。
もしダメだったとしても、一人でやるしかない。

ただ、その為には靈夢に護身術などを教えてもらつ必要があるの
だけど……。

とりあえず、出来る事をやって、後悔はその後にでもすれば良い。
香霖堂の店主さんとも話せるぐらいには知り合いに慣れたし、簡
単には潰れないだろう。

それ以外にも、予想外の事が色々と起こった。

正直、告白をされた事は嬉しい。

嬉しいけど、もしそれに良い返事をしてしまったら、俺は幻想郷
から離れられるだろうか……。

多分、無理だ。

きっと、離れたくないな……。

そうすれば、現代に居る親達にも顔を見せる事なく人生を終えて
しまう……。

それに、寿命の関係もある。

そんな色々な事を考えると、とてもじゃないが、直ぐに答えは出
せない。

どつかの極楽大作戦の主人公みたいな状態になるとは思つてもみ
なかつた……。

色々と考えながら横になつていった所為か、はたまた、今日の行動
で身体が疲れていた所為か、睡魔が俺を襲う。

新しい問題を色々と抱えつつ、睡魔に身を任せ、俺の幻想郷ライ
フ二日目が終わつた……。

とある廊下にて……。

「ふふふ」

「気持ち悪いわね……」

「いえ、自分の気持ちに正直なると書つ事がここまで嬉しい事だと
は思わなくて」

「そう、良かつたわね。でもね、文。私も負ける気は無いわよ」

「へ？」

「それじゃ、お休み……」

「スー、スー」

第一話 就職活動？ 終幕（後書き）

「ここまでが、プロローグ的な内容になります。

本当は告白させる気なんて無かったのに、気付いたら文さんが勝手に行動していました……（汗）

恋心を持つていると書つ「コアンスだけを書くつもりだったのに……

（苦笑）

と言つたが、何処でフラグが立つたのか作者にも分かりません（汗）まあ、恋は唐突にとも言つますし、ここには大らかな心で見て頂けると助かります（汗）

とりあえずイチャラブ系の話にはならないです。

あと、この話のメインは恋愛とは別なので、恋愛のタグは付けませんので、「アーテ承下さい」。

まあ、そんな話は置いておくとして……。

上でも書きましたが、□□までがプロローグ的な内容となります。

今後の話はここまでを基盤として展開されていきます。

こんな感じですが、今後とも宜しくお願ひ申し上げます。

次回予告……

第三話 事実は小説よりも奇なり…… 一幕

「そうね。やつと本来の博麗神社が見れたわ……」
「靈夢は俺の隣に立ち、そつと微笑みを魅せる……」

11月中旬～下旬公開予定。

第三話 事実は小説よりも奇なり…… 一幕

- 01 -

幻想郷に来てから早い物で、既に自分の感覚で一ヶ月が過ぎようとしている。

仕事が無いと分かつてからの俺は、自分の仕事を作る為に、色々な所へと出没していた。

まずは香霖堂。

そこで、一万を幻想郷の通貨に変え、空気入れと自転車のパーツとタイヤを購入。

古くなつた自転車が幻想郷に流れていたので、店主さんに頼んで売らない様にお願いしていた。

次に博麗神社を直している大工さんに頼んで、多くの荷物が載せられる荷台を作つて貰う。

ただ大工さん達も忙しいので、道具と木材を買い、ある程度は自分で組んだ。

不安な場所や作り方などは、親方さんに見てもらつながら作つたけど……。

荷台がある程度の完成したのを目処に、文へ頼んで新聞に広告を載せてもらつた。

かなり卑怯な方法だとは思うが、新しく事業を起こす上で宣伝は必要不可欠な事なのだ。

文の書く新聞はゴシック紙に近い内容の為、どこまで読者が付いているかは謎だった。

まあ、ゴシック紙と言つても、内容はちゃんと裏付けが取れた内

容なので信憑性もあるから、意外に面白い記事もあつたりする。

それでも、幾分かの効果はあつた様で、里に材料や食材を買いに行くと、ある程度、話しかけられる様になつた。

因みに、ちやんと記事の内容はチェックしているし、里で見せて貰う。“文々。新聞”と俺がチェックする内容は一緒だつたので、問題は無いだろう。

この仕事を始めるに当たつて、靈夢と萃香、そして文に今回の事を相談した結果、良い返事が貰えた。

萃香も手伝ってくれるとの事で、何とか仕事中に殉職と言つ事には成らなさそうだ。

文に関しては情報関係を手伝つてもらえる事になつた。

なので、新聞を使った広告を出してくれた訳なのだけど、交換条件として仕事中に密着取材を受ける事になつた。

何と言つか、やっぱり諦めて無いらしい……。

寧ろ本人が『これでずつと側に居られますね!』と言つて来た事で、顔が赤くなつたのは言つまでも無い……。

靈夢は場所の提供をしてくれた。

今後は博麗神社を拠点に仕事をして行く事になる。

後は、慧音さんの家の側と人里の数箇所にポストを立てれば計画は完了となる。

ポストを立てる事に関しても人里の長と慧音さんに許可は既にもらつてある。

博麗神社の改修工事が終わると合わせて、俺の仕事も開業する予定なのだけど、神社の改修作業は、大工さんが優先してくれているのか、予定よりも早く終わる事になりそうだった。

「まあいなあー。間に合ひつかな。これ……」

田の前にある相棒を見ながら愚痴る。
そこには荷台がひつくり返つており、自転車の車輪が取り付けられている。

動力を車輪に回そようとチョーンなどを使つて試行錯誤を繰り返したが、上手く回つてくれない。

そもそもチョーンの長さが足りないので、紐で代用している時点で上手く回る訳が無いのだ……。

靈夢は『河童に協力してもらつたら?』と言つたが、その河童を俺は知らない。

萃香や文にも連れて行くと言われたが俺が断つた。

理由としては、一人で出来る所までやつて見たいからだ。

「とは言つても、お手上げかなあー……」

「おー、今日も頑張つてるなー」

「あ、親方さん」

俺が相棒と睨めっこをしていると、後ろから大工さんが声を掛けてくる。

大工さんはそのまま俺の隣に並び、一緒に相棒を見た。

「これ、ほぼ完成してるじゃねえーか」

「そうですね。手で押すなら……と言つ条件付ですけど」

そう言つて、車輪を回す俺。

車輪は空み無く回る。

このバランス調整が凄く難しかつた……。

「やつぱり時間を掛けると、それなりに出来るもんだなあ」「親方さん達のご協力のお陰でここまで完成したのですけど……ちよつち、まだ足りないかなーと……」「時には妥協も必要だぞ?」

「分かつては居るのですが、納得出来ないと言つが、何と言つが……。何かもどかしい感じです」

俺は苦笑しながら大工さんへ言つ。

大工さんは俺の顔を見ながら笑い、そして肩を叩かれる。

「はつはつは。風紫も職人気質だな!」

「そうですかね?確かに外来に居た時の仕事も職人の様な事をしてはいましたけど……」

「お。そうなのか?」

「ええ、裏方関係と言つかそう言つ類の仕事ですね」「なるほどな」

そんな世間話を相棒の前でしていると、お茶とお茶菓子を持って現れる靈夢。

「おひ、お嬢じやねえか」

「一人共、」苦労様。これ、休憩にどひそ」

そう言つて大工さんに渡すお茶とお茶菓子。大工さんはお礼を言いながら受け取ると、作業をしている職人さん達を呼んで休憩を入れていた。

「ありがとう」やこます。靈夢」

「どういたしまして。じいりで首脳はどうへ。」

「そろそろ限界が来ていますね……」

「頭の？」

そう言つて靈夢は笑う。

確かに頭も悪いから言こ返しは出来ないけど、それでも酷いと思つただけど……。

「まあ、やうですね……」

だから、俺はぶつきりぱつた返答を返す。

靈夢は俺の反応に笑い、満足したのか謝りながら口を開く。

「「めん、」めん、冗談よ。」ひなつたら手で引くしか無いんじやない？路面だつて良い訳じやないんだし、

「確かにそうですけどね……。もう少し凝りたかったのですけど、

やつぱり妥協も必要ですね……」「

「そりそり。ある程度で妥協を入れないと前に進めない事だつてあるわよ」

やつぱりお菓子を食べる靈夢。

俺はお茶を啜りつつ、自分の粗棒の車輪をもう一度回す。
そんな事をしていると、空から何かが向つて来ている事に気がつき、
俺は空を見上げ、気配のする方を確認する。

「どうしたのよっ。」

靈夢が不思議そうな顔をして聞いて来た。
俺は視線をそのままこ、靈夢へ返答する。

「いや、空からこっちに向かつて来ている気配が……」

「わつ? 私は何も感じないけど?」

靈夢は周りを見ながら言つ。

長距離で掴める感覚はその日の調子で変わるナビ、微かに気配が
するのは間違ひ無い。

「微かに……ですけどね。文ですね、コレ。……いや、多分、……」「
ふーん。あんたも成長してるわね……。お母さんは嬉しいわ……」「
今日は偶々ですよ。偶然、調子が良いだけです。でも、褒められ

るのは嬉しいですが……」

苦笑する俺に対して、泣きまねをする靈夢。

俺が幻想郷に来てから一週間たつた頃、だろつか。

靈夢が俺の靈力を鍛えると言出した。

武器である子狐丸もあつた事だし、身を守れるぐらにはならないとダメと言う事で修練が始まった。

その際、靈夢から子狐丸だけだと接近戦で不利と言う事で札も少し貰つた。

まあー、基本は逃げる為の訓練なのだけど……。

そんな訳で、靈夢に言われる仕事の合間にチマチマと修練を積んだ結果、人よりは少し鋭い程度の感覚を持つ事が出来る様になった。まあ、コレのお陰で悪い妖怪に襲われずに済んでいるのも事実だ。気前の良い妖怪も中にはいるので、情報交換程度に話したりもするし……。

何気に、妖怪と仲良くなりたいと言つ目標もチマチマと成し遂げているのかもしれない。

「あ、見えてきましたよ」

俺が視認出来た事を靈夢に報告すると、靈夢も同じ方向を見る。そこには鴉の様な羽を持つた妖怪が一匹。やつぱり気配の正体は文だつた。

「風紫、様子を見に来たわよー」

「ここにちは。今日も暇なのですか?」

「あんた、今日も暇なのね……」

文は俺の側へ着地し、相棒を見ながら横を抜けた後、そのまま俺の隣へ並び、俺と靈夢へ向つて口を開く。

「二人共、？も？は酷いんじゃないですか？」
「だって、毎日来ているじゃないですか？」

そうなのだ。

あの日から文は取材と称しては、毎日、博麗神社に姿を現している。

萃香でさえ来ない日があるのに……。

桜さんの苦労が目に浮かぶ。

因みに、文が桜さんを博麗神社何度か連れて來たので、面識はあつたりする。

その際、文が俺の事を彼氏だと勝手に紹介していたらしく、桜さんが色々と混乱していたけど、何とか誤解は解けた。

「ソレはアレよ。その……、取材よー。」

「へいへい」

「何よー、その反応。あ、正直に言つて欲しいの？貴方に会いに來たつて……」

何でそんなにクネクネしながら言つのです……？

「別に言わなくていいですからー。」

「あんた達、程々にしないわよ。」

「靈夢が呆れながら注意をする。

俺は熱くなる顔を隠す様に相棒の下へ移動し、相棒をひっくり返す。

文は靈夢の隣へ移動し、お茶を貰いつつお茶菓子を一口。相棒をひっくり返した後、その様子を見て思わず苦笑が出る。

「どうしたのよ。」

靈夢が首を傾げながら聞いて来た。

俺は素直に今の気持ちを口に出す。

「いや、何がいつ言いつていいなあと思つて。日常を「こんな感じで過ごせるなんて思つても見ません」だから

「ふーん。風紫さえ良いなら、ずっと同じ居ても良いんだけどね?」

「あはは、のんびりと考えますよ」

「私は、風紫が帰るなら一緒に付いて行くだけですけど。外来がどんな事になつてゐるか興味もあるしー。」

文が爆弾発言をしているが、遭えて流す。
靈夢と文は、外来の話題で話し始めた。

こんな仄々とした日常なんて、俺が居た世界ではそんなに無いだろつた。

休日でも仕事だったし、何処かに行つて休養を取つたりする事が稀だった。

だから、こうした事が凄く新鮮になる。

多分、俺は凄く恵まれている。

神隠しの後、下手したら死んでいたかも知れないのに、直ぐに靈夢や萃香に会えた。

そこから始まる俺の新しい生活や、俺を、その……好きだと書いてくれた文も居る。

こう言う日常を俺は無くしたくないと思つてはいるし、でも、現代に帰らないと行けないと言う気持ちもある。

何時かはこの気持ちにも決着を付けないと行けない。

だけど今は、少しごらいこの幻想郷を楽しんでも良いよな……。
相棒を見ながらそんな事を考えていたら、何時の間にか大工さんが隣に居た。

「風紫、相変わらずモテモテだな?ええ?」

顔が少し怖いのです……。

俺は手を振りながら親方さんの質問に返答をする。

「氣のせいですよ。俺がモテる筈ありませんから……」

「そうは思わねえが、まあいい。ほれ、頼まれてた塗料だ。緑と茶色のな」

「わあ！有難うござりますーーー！」

俺は塗料を受け取つて、大工さんに頭を下げる。
コレで相棒がより完成に近づく。

「なあーに、別に良いつて事！ちゃんと代金も貰つてゐるしな」
「いえ、でも忙しい中で怠なお願いでしたから、本当にありがとうございます！」
「気にはすんな！足りなくなつたら、また何時でも言つてくれ！」
「はいっ！」

大工さんは笑いながら自分の現場に戻つて行つた。

その様子を確認した後、俺は前掛けを付けて茶色の塗料を開ける。
茶色で下地を作り、上に縁で葉っぱ等を書く予定だ。

妖怪に襲われた時、こつする事である程度のカモフラージュは出来る。

鼻が良い妖怪などには一発でバレてしまうが、何もしないよりはマシだ。

「結局、手押しこするのね」

靈夢が作業を始めた俺の側へと移動していた。
その隣には当然、文も居る。

「はー。やつぱり動力を付けるとなると大変ですし、その辺りは追々やるうかと。それに塗料を塗るにも、数日の時間は必要ですし、

間に合わない可能性もありますからね。だったら、安全策を取る事にします」

「その方が良いわね。河童に頼めば直ぐだけど」

「あはは。河童さんの技術は知り合つてから頼む事にしますよ」

俺は塗料を塗りながら靈夢の質問に答える。
文は黙つて俺の作業を見守つていた。

いや、違うな……。

メモを取りつつ、写真も取つて居るから、黙つてと言つても無いな……。

「さて、それじゃ私は夕餉の準備をしてくるわね。文、あんたはどうするの?」

「もちろん、一緒に頂きます!」

「それじゃ、支度、手伝いなさいな

「はーい」

靈夢と文は一人で社務所兼母屋の方へと向つて行つた。

何か傍から見ると姉妹みたいな感じだ。

魔理沙とか萃香もそうだけど、靈夢つてお姉さん氣質でもあるのかも知れない。

そんな事を考えつつ、塗り残しが無いように集中して塗つて行くのだった。

完成、おめでとうーーー！」

あれから数日後、神社の修繕と俺の相棒作りが終わつたのを祝つて、身内で小さな宴会が開かれた。

動力を詰めた俺の相棒は直ぐに完成した
まあ、塗料を塗り文字を書くだけだつたし、当然と言えば当然だ
が、神社に関しては本当に凄く綺麗になつた。
改めて見ると、本当に立派だ。

が居た。

「本来の姿を見せられるとい、言葉を無くしますな……」

俺は右手にお猪口を持ちつつ、一人で言つ。何とも言えない感動が俺の全身を包み込む。

「そうね。やつと本来の博麗神社が見れたわ……」

何時の間にか靈夢が隣に居た。

俺が靈夢に気付いて隣を見ると、靈夢は頭を下げていた。

「素直にお礼を言つわ。本当にありがとう、風紫。」しかし、神社

本来の姿に戻れたのは貴方のお陰よ」

「ちよつー顔を上げて下さい。コレは俺の我侭でもあるのですから、
そんなに頭を下げるのも困りますー!」

俺は靈夢の肩を掴み、顔を上げさせる。

靈夢は顔を上げた後、微笑みながら「ありがとうございます」と一言口にする。

今の靈夢の微笑みは、どんな妖怪だって人間だって魅了する。
そのぐらいの魅力が込められていた。

当然、それを目の前にした俺は見惚れてしまう。

「どうしたのよ?」

「いや、その……」

靈夢の言葉で我に返るが、酔っている所為で言葉が上手く出ない。

「まったく、変な風紫ね」

そう言つてまた笑う靈夢。

だから、その笑顔が反則だと何度も……。

心の中で溜息を吐きながら俺は目線を靈夢から外し、神社を見な

がらお猪口を口にする。

普段はあんまりお酒を飲まないが、こいついつ宴会などは別だ。
流石の俺でも宴会などはお酒を口にする。

前々から気になっていた萃香のお酒を少し分けて貰つたが、これ
が意外と飲みやすい。

「ねえ、風紫」

萃香から貰つたお酒をゆっくりと口に含んでこると、神社を見て
いる靈夢から声が掛かつた。

俺はその言葉で靈夢へと視線を向ける。
その顔はどこか真剣だった。

「やつぱり、まだ帰りたい？」
「どうしたのですか？急に……」

突拍子も無く行き成りな事を言い出す。
俺は現実世界には帰れないのだろうか……。

「ただ何となく。帰れる時には帰すわよ。ただ……」

そこで口を開じる靈夢は少し俯き、どこかハツキリしない。
何か思う事でもあるのだろうか……。

そんな靈夢を元気付ける様に声を少し大きめにして言葉を口にする

る。

「……。うーん、帰りたく無いと言えば嘘になりますね。でも今の状態だと、帰れる時が訪れてくれるのかも分かりません……。それに本当はちょっと分からなくなっていました。ココに来てから日数もそんなに経ついませんが、ハツキリとココの生活が好きだと言えますし、でも外の事も気になると言えば気になります。多分、俺の中ですっと迷う事になりますけど、考えられるだけ考えて答えを出そうと思います。だから、答えを出すまでは迷惑かも知れませんがお世話になりますね、靈夢！それに俺の仕事は明日からですし、気合を入れないとっ！！」

俺は靈夢に迫力の無い力瘤を笑いながら見せる。

幻想郷に来てから単発のお仕事は結構やつてしたりする。
神社の修繕で人が足りない時に手伝つたり、慧音さんに言われて学校の修繕やら用品を自作したり……。

時には香霖堂へ赴き、店主さんと雑談しながら鑑定をしたり、慧音さんに言われて学校で算数を教えたり、文に拉致されて妖怪の山へ連れて行かれそうになつた時は、流石に焦つたけど……。
人間や妖怪を問わず、里でも色々と知り合いが増えた。

その中でも、慧音さんが獣人で店主さんが半人半妖だったのは驚いた。

普通に人間だと思っていたよ……。

文とか萃香に関しては羽に角で直ぐ分かつたけど、あの二人は見た目が人間だし、本当の事を教えてもらつた時は本当に驚いた。

そんなまだまだ俺だけど、何とかこの一ヶ月を過ごして来ているし、一ヶ月しか経つていないとしても、俺はこの幻想郷を好きになっている。

今の現代も好きだが、このままの生活も嫌いじゃない。
だから余計に戸惑う。

帰りたく無いと言う気持ちが出てくる事に……。
でも、何れは必ず決めないとダメな事だし、俺にはちゃんと答え
を出す義務がある。

今は答えを出せなくとも、何時か必ず……。

「あんたも忙しいわね。ここんとく表情が変わって面白いわ
ははは……。すみません」

靈夢の言葉で我に返り、俺が見た時の靈夢は手を口に当てて笑つ
ていた。

確かに考え方をしていたとしても、相手が居る所で考える内容じ
やないな……。

「別に謝らなくても良いわよ。明日から期待してるわよ?」

「はい!…頑張ります!…!」

俺はサムズアップを靈夢に見せ、その後、一人で神社を見る。

……。
よし。

「靈夢、ちょっとコレ持つていて下さー」

そう言つて、お猪口とお銚子を畠然としている靈夢へ預け、本殿の側まで歩き、現代の通過では無く、幻想郷の通貨を賽銭箱へ入れた。

慧音さんや大工さんのお手伝いをした時とかに、ちゃんと給金は貰つていたりしたのだ。

微々たる賃金なのだけど……。

そして、一拝一拍手一拝。

そこに思つるのは、この世界の安泰と自分の安泰、最後に、幻想郷で出会つた人達の無病息災。

賽銭箱に入れた金額ではあまりにも多い願いかも知れないが、それでも願わざには居られない。

俺は靈夢の隣へ並び、お猪口とお銚子を受け取る。

「ありがとうね」

今度は笑いながら言つてくれた。
だから俺も笑いながら返す。

「どういたしまして」

言つた後、お酒を飲もつとしてお猪口にお酒が入つてい無い事に気付く。

手酌でお酒を注いだつとすると、靈夢が注いでくれた。

俺も靈夢のお猪口へお酒を注ぐ。

そして、俺と靈夢は無言で杯を交わした。

「なーに一人で良い雰囲気になつてんだ?」

そこに来たのは魔理沙だつた。

ほんのりと顔を赤くし、それなりに酔つてゐる様だつた。靈夢は魔理沙の言葉に対し、ぶつきら棒に返事を返す。

「別に……。そんなんじゃ無いわよ」

「ふーん。まあ、別に良いんだけど。あつちに居る大工と飲み比べする事になつたのよ。靈夢も参加するわよね?」

魔理沙の口調は普段、男言葉が率先して出るが、酔つてゐると、男言葉は也を潜める。

寧ろ、男言葉を使つていてない会話を聞いていて、魔理沙が男言葉を無理して使つている感覚がある。

最初、それに気が付いた時、俺は魔理沙に理由を聞いた。帰つて来た答えは意外に簡単で、『なんとなく』なのだそうだ。ただ、あの魔理沙の表情を見る限り、何かあるのだろうとは思う。目を下弦の月へ向け、どこか寂しそうな表情をしていたのだから……。

『魔理沙』

『ん?』

『余計な事かも知れないと、俺や靈夢とかの前ではあまり無理しないで下さいね』

『……。ああ、わかつたよ』

余計なお世話だとは思つたが、その言葉を口に出さなければと思い口走つてしまつたけど、魔理沙は優しい微笑みで返事を返してくれた。

魔理沙でもこんな表情が出来るのかと、ちょっとビックリしたのは内緒だ。

そんな事を考えていると、靈夢と魔理沙の会話が終わつたらしく、靈夢は魔理沙に手を引かれながら大工の居る方へと連れられて行く。俺は連れられて行く靈夢に手を振ると、靈夢は溜息を一つして、手を振り替えしてくれた。

とりあえず、大工を含めて二人が急性アルコール中毒にならない事を祈るだけである……。

「さて、俺は何をしますかね……」

「この場に居る皆さんの姿が確認出来る場所に座つて、一人ごちる。……と言つても、本殿の階段に座つただけなのだけど。

目の前には明日から共に活躍するであろう相棒が置かれている。萃香と靈夢と魔理沙は大工の皆と一緒に飲んで盛り上がつていた。酒の肴は、俺と靈夢で結構な量を作つたのだが、既に全部が無くなつてゐる。

他には大工さんや文が持つて来てくれた肴が少量あるだけだ……。

大工さんの持つて来た肴は、里でも評判の料理だつた。

文は桜さんを使ってまで大量の山の幸を持って来てくれた。

桜さんにも参加してもらう様に頼んだが、山の警護があるらしく、直ぐに戻つてしまつた。

山の幸は川魚だつたり山菜だつたりと富んだ内容だつたので、肴

が無くなりかけた所で追加の料理を作っていたのだが、今は皆がそれぞれで勝手に食べている。

そんな様子を見つつ、楽しくもあるが憂鬱にもなつて来る。
後で片付けるのって、きっと俺と靈夢なのだらう……。
はあ。

そんな思考と共に皆を眺めていたら、一人居ない事に気付いた。

「あれ？ 文は何処にいつたんだ……」

俺は回りを見渡して確認するが、文の姿は確認が出来なかつた。
何も言わずに帰つたのかなと思つていると、頭の上から声が掛か
る。

「やつと……、気が付いてくれたみたいね」

神社の上で飲んでいたのだろう。

文は上から降りた後に俺を連れて、再度、神社の屋根へと上つた。

「本当はもつと早くに誘つつもりだつたのに、靈夢と良い雰囲気にになつていたから入り込めなかつたわ……」

「ははは。別にそんな空気には成つて無かつたと思いますよ~。」

「ただ、一緒に喋つてお酒を飲んでいただけだ。」

「そんな良い雰囲気には成つて無いと思うのだけど。」

「……、まあ……」

盛大に溜息を付かれた。

何故……！？

「まあ、そんな事より月、綺麗ですよね」

「」の話は続けては拙いと思い、話題を変える。
実際に月は綺麗だし嘘は言つていない。……。

文は少しジト田で俺を見ていたが、フツと表情が柔らかくなり、
俺のお猪口にお酒を注いだ後、話を合わせてくれる。

「そうね。酒の肴には丁度良いわ

「そうですね」

俺も文のお猪口にお酒を注ぎながら肯定する。

お猪口に入ったお酒の中に下弦の月を[写]じ、それを見る。
コレが本当の月見酒。

そう思つてゐるのは俺だけかも知れない。……。

お酒に[写]つてゐる月を見ながらお酒を飲み、そして最後に本当の
月を見る。

お酒の中に居た揺らめく月も綺麗だが、本物の月はもっと綺麗だ
つた。

昔の人レトロが月を見ながら色々と詩を詠んだのが分かる気がするね。

「綺麗ね」

文が言つ。

「そうですね。俺の居た所ではこんなに綺麗に見えませんでしたよ」

俺が肯定する。

「ねえ、風紫」

文のお猪口に酒を注ぐ。

「何ですか？」

文が俺のお猪口に酒を注いでくれる。

「……うう。何でも無い

そう言つて俺の肩に体重を預けながら微笑む文。意外に軽い事に驚きつつも、慣れて居ない状況で身体が変に反応する。

文の仕草を目の前で見せられ、変な所で妖怪でもやつぱり女の子なのだなど感心した。

「……えつと、いつ言う状況に慣れていないので、ドキドキしているのですが……。」

俺は正直に話す。

文はクスクスと笑つているのみ。

俺はお酒を口に含み、用を見ながら飲み干す。

どうしよう、緊張して上手く言葉が出せない……。

「大丈夫、その内に慣れるわよ」

「了解、頑張るです……って言つか、慣れるまでやろうとしないで下さい……」

俺はその言葉に頷きながら反論する事しか出来なかつた。

宴も酣となり、辺りが静寂へと支配されて行く。

文に頼んで屋根から下ろしてもらい、その様子を俺と文は黙つて見ていたが、暫くすると文は飲み疲れたのか、そのまま寝てしまつ。周りを見ると、皆も力尽きたのか、その場で寝てしまつていた。俺は文を所謂、お姫様抱っこをしながら家に運ぶ。

その後、靈夢と萃香と魔理沙を順番に家の中へ入れ、女性陣を布団に寝かしつける。

女性陣達を寝かしつけた後は、宴会が始まる前に毛布を出せるだけ出して置いたので、それを部屋へ取りに行く。

そして、他の大工さん達も毛布を掛けてあげた。

大工さん達には悪いけど、外で寝てもらつ。

身体も丈夫そうだし、風邪とかも大丈夫だろう。

多分……。

毛布を持って大工さん達の所に着くと、飛んでない光景を目にする。

実はこの大工さん達、毛布を持参していた。
もともと徹夜で飲む気だつたらしい。

しつかりしていると言つか、何と言つか……。

俺は持つて来た毛布を全員に掛け終わつた後、顔を軽く洗い、自室に引いてある布団に入り込み、明日の事に思いを馳せながら一人ゆっくりと瞼を閉じるのだった。

第三話 事実は小説よりも奇なり…… 一幕（後書き）

お待たせして大変申し訳ありませんでした。

遅くなりましたが、漸く公開出来ました！

年末から年始に掛けて少し急がしなるので、次回の更新は年内中に
は行いたいですが、ちょっと見通しが立っていません。

遅くとも来年の一月下旬までには公開出来る様に頑張るつもりです。
それでも見守つて頂ける方は見守つて頂きたいと思いますです！！

次回予告……

第三話 事実は小説よりも奇なり…… 一幕

「それじゃ靈夢、行つてきます」

「行つてくるぞー！」

俺達を笑顔で見送つてくれる靈夢。

俺は手を軽く振り、荷馬車を前に動かした……。

12月下旬～2011年1月下旬公開予定。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3452n/>

幻想奏鬼響

2010年11月25日23時45分発行